81	山川	世探 705

令和5年度用
（2023年度用）
山川出版社
内容解説資料
この資料は令和5年度用高等学校教科書の内容解説資料として一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っております。

世界史探究

高校世界史

木村靖二　岸本美緒
小松久男　橋場　弦

基本をおさえて、資料で深める

ダイジェスト版

山川出版社

世界史を学ぶみなさんへ

みなさんは、これからこの教科書で世界史を学習していきます。「歴史総合」を学んだことで身につけた知識や考え方をもとに、さらに深く世界の歴史について理解し、地球世界の課題を探究する科目として、この「世界史探究」があります。人間の歩みは、過去から現在へと連続しています。だからこそ、私たちは世界史を体系的に学ばなければなりません。振り返って考察し、世界各地の歴史を学ぶことは、現在を知り、未来を考えることにつながるのです。

もしかすると、みなさんは歴史の授業を、過去のできごとや人物を暗記する科目と考えているかもしれません。覚えるべき事項はもちろんありますが、覚えることが目的ではありません。この教科書には、数多くの問いが設けられています 。問いについて考え、教科書や授業で関心をもったことをより深く調べていくことで、様々な問題に主体的に取り組む力がついてきます。ぜひみなさんが生活する社会へも目を向け、様々な疑問をもってください。

本書の第Ⅰ部では、世界の諸地域で歴史的特質が形成されていく過程を、第Ⅱ部では、地域間の交流が記述されています。第Ⅲ部では、諸地域が統合され変容していく過程として、第二次世界大戦までの時期が記述されています。第Ⅳ部では、現代世界の様々な課題が記述されています。

また本書では、身近な問題から歴史を考える題材として「世界史へのまなざし」を設けています。 歴史とは、決して一部の特別な人が築いたものではありません。皆さんも悠久（ゆうきゅう）の歴史の一部として存在しているのです。身近な事柄に注目して、歴史について考えてみてください。

各ページには、「歴史的な見方・考え方」を身につけるために問いかけとともに、グラフや絵画・写真資料を提示しています。そうした資料の読みときにも、積極的（せっきょくてき）に取り組んでください。さらに「探究しよう」のページで、学習した事柄を、資料を活用してより深く考察してみてください。

本書を利用して、みなさんが、地球世界の課題を見出し、その解決に向け探究する力を身につけてもらうことを、心から願っています。

巻頭付録として、**世界史の大きな流れの把握ができるよう**、同時代の地図でそれぞれの時代の特徴を示しています。

配当時間例（月／時数）

4月／9

5月／9

6月／11

目次

世界の自然（表見返し）

世界史を学ぶみなさんへ

2 世紀の世界 …… 4
8 世紀の世界 …… 6
13 世紀の世界 …… 8
16 世紀の世界 …… 10
19 世紀の世界 …… 12

世界史へのまなざし❶ 地球環境からみる人類の歴史
自然環境と人類の進化 …… 14

世界史へのまなざし❷ 日常生活からみる世界の歴史
料理からみる世界のつながり …… 18
ミュージアムの歴史 …… 20
家族の歴史 …… 22

第Ⅰ部 諸地域の歴史的特質の形成 …… 25

第Ⅰ部へのアプローチ …… 26

第1章 文明の成立と古代文明の特質 …… 28
1 文明の誕生 …… 28
2 古代オリエント文明とその周辺 …… 30
3 南アジアの古代文明 …… 35
4 中国の古代文明 …… 37
5 南北アメリカ文明 …… 40

第2章 中央ユーラシアと東アジア世界 …… 42
1 中央ユーラシア …… 42
2 秦・漢帝国 …… 44
3 北方民族の活動と中国の分裂 …… 47
4 東アジア文化圏の形成 …… 50

第3章 南アジア世界と東南アジア世界の展開 …… 55
1 仏教の成立と南アジアの統一国家 …… 55
2 インド古典文化とヒンドゥー教の定着 …… 58
3 東南アジア世界の形成と展開 …… 60

第4章 西アジアと地中海周辺の国家形成 …… 62
1 イラン諸国家の興亡とイラン文明 …… 62
2 ギリシア世界 …… 64
3 ローマと地中海支配 …… 71
4 キリスト教の成立と発展 …… 77

第5章 イスラーム教の成立とヨーロッパ世界の形成 …… 79
1 アラブの大征服とカリフ政権の成立 …… 79
2 ヨーロッパ世界の形成 …… 83

章立ては『詳説世界史』に準拠！

第Ⅱ部 諸地域の交流・再編 …… 91

第Ⅱ部へのアプローチ …… 92

7月／6

第6章
イスラーム教の伝播と西アジアの動向 …… 94
1 イスラーム教の諸地域への伝播 …… 94
2 西アジアの動向 …… 97

第7章
ヨーロッパ世界の変容と展開 …… 101
1 西ヨーロッパの封建社会 …… 101
2 東ヨーロッパ世界 …… 104
3 西ヨーロッパ世界の変容 …… 107
4 中世文化 …… 112

第8章
東アジア世界の展開とモンゴル帝国 …… 114
1 宋とアジア諸地域の自立化 …… 114
2 モンゴルの大帝国 …… 119

9月／12

第9章
大交易・大交流の時代 …… 123
1 アジア交易世界の興隆 …… 123
2 ヨーロッパの海洋進出、アメリカ大陸の変容 …… 128

第10章
アジアの諸帝国の繁栄 …… 132
1 オスマン帝国とサファヴィー朝 …… 132
2 ムガル帝国の興隆 …… 135
3 清代の中国と隣接諸地域 …… 137

第11章
近世ヨーロッパ世界の動向 …… 141
1 ルネサンス …… 141
2 宗教改革 …… 143
3 主権国家体制の成立 …… 146
4 オランダ・イギリス・フランスの台頭 …… 150
5 北欧・東欧の動向 …… 154
6 科学革命と啓蒙思想 …… 156

第Ⅲ部 諸地域の結合・変容 …… 159

第Ⅲ部へのアプローチ …… 160

10月／11

第12章
産業革命と環大西洋革命 …… 162
1 産業革命 …… 162
2 アメリカ合衆国の独立と発展 …… 165
3 フランス革命とナポレオンの支配 …… 168
4 中南米諸国の独立 …… 172

11月／12

第13章
イギリスの優位と欧米国民国家の形成 …… 174
1 ウィーン体制と政治・社会の変動 …… 174
2 列強体制の動揺とヨーロッパの再編成 …… 178
3 アメリカ合衆国の発展 …… 183
4 19世紀欧米文化の展開と市民文化の繁栄 …… 187

第14章
アジア諸地域の動揺 …… 190
1 西アジア地域の変容 …… 190
2 南アジア・東南アジアの植民地化 …… 193
3 東アジアの激動 …… 196

12月／7

第15章
帝国主義とアジアの民族運動 …… 201
1 第2次産業革命と帝国主義 …… 201
2 世界再分割と列強の対立 …… 206
3 アジア諸国の変革と民族運動 …… 209

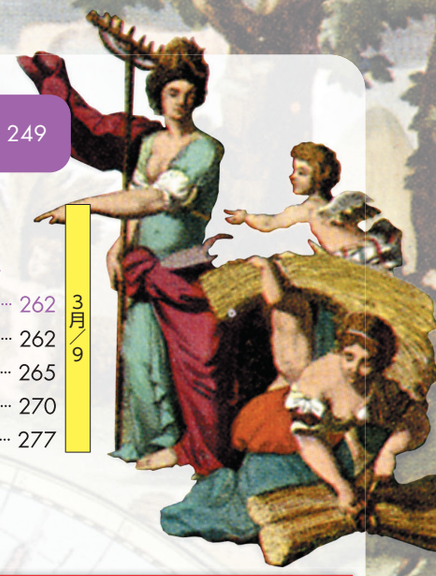
1月／8

第16章
第一次世界大戦と社会の変容 …… 216
1 第一次世界大戦とロシア革命 …… 216
2 ヴェルサイユ体制下の欧米諸国 …… 220
3 アジア・アフリカ地域の民族運動 …… 226

第17章
第二次世界大戦と新しい国際秩序の形成 …… 232
1 世界恐慌とヴェルサイユ体制の破壊 …… 232
2 第二次世界大戦 …… 237
3 新しい国際秩序の形成 …… 242

探究活動をより深めるために、二次元コードから、本文に掲載した図版の全体図や部分拡大、追加の図版・文字資料などを参照できるようにしました。

第Ⅳ部 地球世界の課題 …… 249



2月／9

第18章
冷戦と第三世界の台頭 …… 250
1 冷戦の展開 …… 250
2 第三世界の台頭とキューバ危機 …… 254
3 冷戦体制の動揺 …… 257

3月／9

第19章
冷戦の終結と今日の世界 …… 262
1 産業構造の変容 …… 262
2 冷戦の終結 …… 265
3 今日の世界 …… 270
4 現代文明の諸相 …… 277

地球世界の課題の探究 …… 279
予備2 世界史年表 …… 280
合計105時間 索引 …… 288
現代の世界（裏見返し）

各章に、資料読み解きのスキルや考察力が身につく「探究しよう」を掲載しました。

探究しよう

- ハンムラビ法典は何を定めたのだろうか …… 31
- 殷墟はどのような墓なのだろうか …… 38
- 唐の女性はどのような生活をしていたのだろうか …… 54
- ヒンドゥー教が人々に信仰された理由を考えよう …… 59
- アレクサンドロス大王はどのような人物だったのだろうか …… 68
- ローマの人々は「コンスタンティヌス帝の凱旋門」を通して何を感じたのだろうか …… 74
- カール大帝が象を手に入れたかったのはなぜだろうか …… 87
- イスラーム文化の多様性をモスクから考えてみよう …… 97
- 西ヨーロッパ各国で、国王の権威はどのように変化したのだろうか …… 108
- 宋代の開封はどのような都だったのだろうか …… 117
- 中国製品は、なぜ世界で人気だったのだろうか …… 126
- アステカ王国をスペイン人が征服できた原因は何だったのだろうか …… 131
- オスマン帝国はなぜ繁栄を謳歌できたのだろうか …… 134
- 清はどのように多くの異民族を統治したのだろうか …… 138
- 17世紀のヨーロッパは、どのような時代を迎えていたのだろうか …… 149
- 科学革命は、ヨーロッパの人々にどのような影響を与えたのだろうか …… 157
- 産業革命は、人々の暮らしをどのようにかえたのだろうか …… 164
- 自由貿易には、どのような期待が込められていたのだろうか …… 176
- ヨーロッパ諸国・アメリカ合衆国の工業化はどのように進んだのだろうか …… 186
- 19世紀前半、オスマン帝国はどのような改革をおこなったのだろうか …… 192
- 太平天国とはどのような勢力だったのだろうか …… 199
- 19世紀末、社会主義にどのような変化が生じたのだろうか …… 204
- 「中国」という国名にはどのような意味があるのだろうか …… 210
- 魯迅はどのような覚悟をもって『狂人日記』を書いたのだろうか …… 226
- ニュルンベルク国際軍事裁判では何が裁かれたのだろうか …… 245
- 西側諸国はどのようにして経済の復興と成長を実現したのだろうか …… 252
- ベトナム戦争は、日本と大韓民国にどのような影響をおよぼしたのだろうか …… 260
- 中東の情勢に、アメリカはどのように関わっていたのだろうか …… 269

【本書の使用上の注意】
在位・在任・生没……原則として元首は在位・在任年を、他の人物については生没年を付記した。
外国語の仮名表記……人名および地名は原語に近づけて表記するようにしたが、慣用の定着しているものはこれに従った。
資料引用…できるだけ必要な部分にとどめたが、前略・後略は特別には記さなかった。適宜、省略・表記の改変などをおこなった。出典は文末に（　）の形で示した。
国名表記……国名は、つぎのように表記する場合がある。〔日本：日、中国：中、韓国：韓、アメリカ：米、ロシア：露、イギリス：英、フランス：仏、ドイツ：独、オーストリア：墺、イタリア：伊、オランダ：蘭、ソヴィエト社会主義共和国連邦：ソ〕

本書掲載の二次元コードからインターネットを使用した学習ができます。二次元コードの使用にあたって使用料はかかりませんが、通信料がかかります。インターネットを使用する際には、先生の許可を得たうえで使用してください。また、使用にあたっては個人情報の扱いに十分注意してください。

◆二次元コードのあるページ
p.31／p.39／p.52／p.54／p.61／p.64／p.89／p.98／p.99／p.109／p.116／p.127／p.134／p.139／p.169／p.184／p.191／p.193／p.234／p.246／p.262

16世紀の世界

ヨーロッパ主導による「海の時代」の幕開け

16世紀、アジアには3つの帝国が繁栄していた。東アジアでは、14世紀後半に成立した明が自国を中心とした朝貢体制を成立させていたが、中国産品を求める周辺諸国の人々は、明の貿易制限の打破を試みていた。南アジアでは、ティムールの子孫が北インドに侵入してムガル帝国をたてた。イスラーム教徒主体のムガル帝国に対し、南インドにはヒンドゥー教の国家が成立して、インド洋交易で繁栄した。西アジアでは、14世紀半ばからバルカン半島へ進出していたオスマン帝国が、16世紀には地中海の制海権を握るなど、全盛期を迎えていた。

オスマン帝国の圧力に対し、ヨーロッパ人は新航路の開拓へ乗り出した。ポルトガルはアフリカ沿岸部とインドに、スペインは大西洋を横断してアメリカ大陸に進出した。さらにスペインは太平洋を横断して、アメリカ大陸産の銀を東南アジアに運び、そこで現地の交易に参加した。こうして大西洋・インド洋・太平洋の交易ルートがつながったことで、地球的規模の交易網が成立し、遠隔地の商品がもたらされて人々の生活を豊かにした。その後、ヨーロッパ経済の中心は、ポルトガル・スペインから、オランダ・イギリスに移っていった。またユーラシアの内陸部では、ロシアがシベリア開発を進めていった。

こうして「世界の一体化」が進むと、その動きは世界的規模の分業体制の形成をうながした。大西洋に面した西ヨーロッパでは商工業が盛んとなる一方、東ヨーロッパは穀物や木材の供給地となっていった。奴隷貿易によって成人層が奪われたアフリカは経済の停滞に苦しみ、ラテンアメリカでは先住民の人口が激減したため、黒人奴隷を用いた大農園が盛んとなっていった。

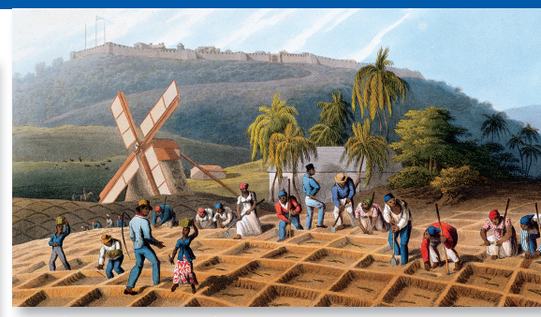
視点を変えて世界史をとらえ直す特集ページ

世界史の大きな流れの把握ができるよう、同時代の地図でそれぞれの時代の特徴を示しています。2・8・13・16・19世紀の世界を収録しています。

アルマダの海戦（1588年）　総数は多いが旧式の船も混在するスペインの無敵艦隊（アルマダ）に対し、イギリス艦隊の船は動きが速く、射程の長い大砲を多く積んでいた。そのためイギリス軍は遠距離からの砲撃戦に徹した。

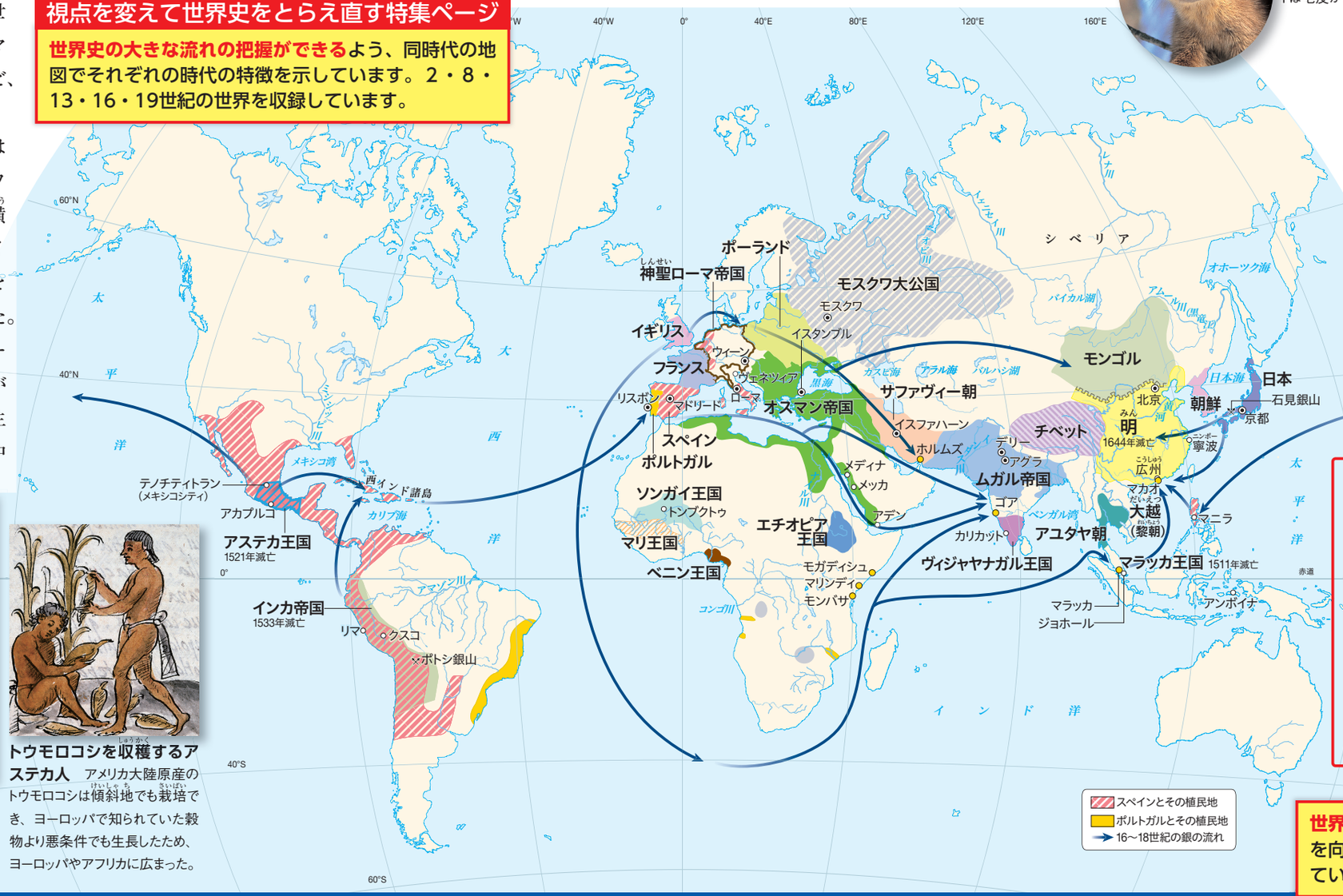
トウモロコシを収穫するアステカ人　アメリカ大陸原産のトウモロコシは傾斜地でも栽培でき、ヨーロッパで知られていた穀物より悪条件でも生長したため、ヨーロッパやアフリカに広まった。

アメリカ大陸産の栽培植物　アメリカ大陸から、ジャガイモ（左）・トウモロコシ（中央）・サツマイモ・トマト・ピーナッツ・カボチャ・タバコ（右）などがヨーロッパにもたらされ、生活文化に大きな影響を与えた。



カリブ海のサトウキビプランテーション　17世紀には、アメリカ大陸や西インド諸島でサトウキビ・タバコ・綿花などの大農園（プランテーション）が盛んになった。

高価な毛皮獣クロテン　高価な毛皮を求めて、ロシア商人は東方のシベリアへ進出した。16世紀末、ロシアの国庫収入の3分の1は毛皮からのものであったといわれる。



万暦帝（在位1572〜1620）　彼の治世の明は、流入する銀の影響で繁栄し、豊かな文化が花開いた。しかし一方で、豊臣秀吉の侵攻を受けた朝鮮を援助するなどの軍事行動により、財政は悪化していった。

織田信長（1534〜82）　戦国時代の武将で、南蛮貿易の利益を得つつ、日本の統一を進めた。

世界史における日本にも目を向けられるよう、工夫しています。

世界史へのまなざし②
日常生活からみる世界の歴史

家族の歴史

「家族」とは何か、と問われたとしよう。多くの人が「血縁による絆」「家族をつなぐ情愛」を連想し、時代や地域が異なってもかわらないものと考えるのではないだろうか。しかし、はたして「血縁」や「情愛」は人類にとって普遍的な家族の条件といえるのだろうか。

子どもという存在

親と子どものあいだには深い絆があり、親は子どもに無償の愛情を注ぐ。これは当たり前のことと思うかもしれないが、親と子どもの関係も時代とともに変化している。16世紀のフランスの哲学者モンテーニュは、「乳児期の子どもを２、３人なくし、残念に思わなかったわけではないが、ひどく悲しむというほどのことではなかった」と述べている。18世紀半ば頃まで、ヨーロッパでの乳児死亡率は非常に高く、「死は避けられない」状況のもと、多くの人々は子どもの死に対し、このような感情をいだいていたと考えられる。また、農村では母乳育児が一般的だったが、都市では生まれた子を里子に出し、乳母に任せる慣習があった。

これに対して啓蒙思想家たちが、両親は子どもの養育に深く関わるべきであり、子どもに対する道徳的な義務と責任があるととなえた。とくに母親の存在が重要とされ、ルソーは「家族の愛情と絆」の大切さを主張し、子どもに献身的で犠牲をいとわない母親像を描いた。子どもの教育については両親であたるべきとされたが、男女の役割分担という考え方がみられ、人格面や知的な教育は父親の役割とされた。また、子どもを「小さな大人」とみなすのではなく、独自の発展段階として、その発達を愛情豊かに見守るべきであるという新しい価値観もみられるようになった[1]。

►p.158

「世界史へのまなざし」は、**自然環境と人類の歴史や日常生活にみられる諸事象と世界の歴史を取り上げ、現在と過去のつながりについて考察し理解すること**をねらいとしています。

1 **家族そろっての昼食**（1840年、ドイツ）

近代的家族と男女の役割分担

18世紀から19世紀のヨーロッパで、身体的特徴によって人間を分析・分類しようとする人類学が成立し、肌の色などから「人種」を区分し、差別的に扱う傾向が生まれた。同様に、男女の身体的な違いからその役割を分担すべきという論調が生まれ、男性は公的領域である国家・経済・社会が、女性には私的領域である家庭がふさわしいとされた。近代市民社会が成立する頃、「男は仕事、女性は家庭」という性別役割分担が誕生した。ただし、こうした分担が可能だったのは経済的に余裕のある階層に限られており、家族の実態は階層によって大きな違いがあった。

日本の家族

第二次世界大戦前の日本では、家父長が家族に対して絶対的な支配権をもつ家制度が存在した。しかし、敗戦が家族のあり方に大きな変革をもたらした。この頃、アメリカ合衆国では、近代的家族＝核家族は人間社会にみられる普遍的な基礎単位であるという主張がなされていた。日本はその影響を受け、日本国憲法で明治以来の家制度を廃止し、家父長権も消滅した[2]。そして、都市化が進むなか、核家族の割合が増えていった。

第24条　家族生活における個人の尊厳と両性の平等
①婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。
②配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家屋に関するその他の事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならない。

2 **日本国憲法**

ジェンダーについても取り上げ、関連する資料を多く掲載しています。

上位国およびおもな国の順位

順位	国名	スコア
1	アイスランド	0.877
2	ノルウェー	0.842
3	フィンランド	0.832
4	スウェーデン	0.820
5	ニカラグア	0.804
6	ニュージーランド	0.799
7	アイルランド	0.798
8	スペイン	0.795
9	ルワンダ	0.791
10	ドイツ	0.787
15	フランス	0.781
19	カナダ	0.772
21	イギリス	0.767
53	アメリカ	0.724
76	イタリア	0.707
81	ロシア	0.706
106	中国	0.676
108	韓国	0.672
121	日本	0.652

分野	スコア（順位）	2019年のスコア（順位）
経済	0.598（115位）	0.595（117位）
政治	0.049（144位）	0.081（125位）
教育	0.983（91位）	0.994（65位）
健康	0.979（40位）	0.979（41位）

（世界経済フォーラムGlobal Gender Gap Report 2020より作成）

3 **ジェンダー＝ギャップ指数**（GGI、2020年）　国ごとのジェンダー＝ギャップ（男女格差）をはかる指数。2005年から、非営利の公益財団である世界経済フォーラムが発表している。

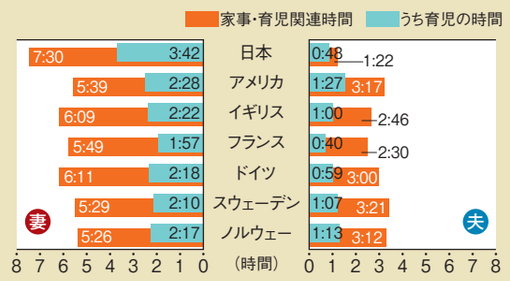
1960年代、日本では国勢調査で多数を占める「夫婦と子ども２人」からなる核家族のことを標準世帯と呼んだが、「夫婦」とは会社員の夫と専業主婦の妻を意味している。しかし、社会の変化によりその割合は減ってきており、現在の日本の家族像は多様化している。

これからの家族

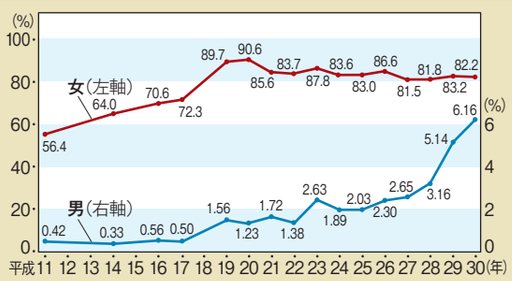
1950年代から60年代にかけて、欧米や日本では女性は若い年齢で結婚して専業主婦になるという規範が定着した。「近代家族」の考え方が広まる時期である。しかし、1960年代末から学生運動が、70年代初頭にフェミニズム運動が盛んになると、制度的婚姻にもとづく性別役割分担型近代家族に転機が訪れた。1985年には男女雇

男女平等はあなたの問題でもあるのです。なぜなら、今日まで父親の親としての役割は、子どもが父の存在を母の存在と同じほど必要だったとしても軽視されているからです。精神病を患い、助けを求めることもできずにいた若い男性達をみたことがあります。彼らは男らしさを失うことを恐れたのです。男らしさを失うことを。実は、イギリスでは自殺が男性の最大の死因なのです。20歳から49歳までにおいて交通事故、癌、心臓病を上回っているのです。心が傷つきやすく不安を抱えている男性もいます。ゆがんだ男性の成功像によって、男性も男女平等の恩恵を得ていないのです。私達は、男性が性別の固定概念に囚われてるなんて話をしたがりません。でも、彼らが囚われているとわかるんです。そして、彼らが自由になった時、当然の結果として、物事は女性にとって変わるでしょう。

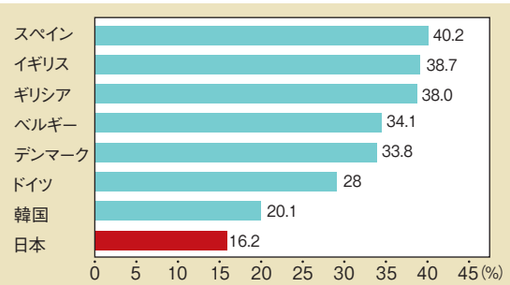
4 イギリスの俳優エマ＝ワトソンの国連でのスピーチ(2014年)



5 6歳未満の子どもをもつ夫婦の１日あたり家事・育児関連時間の国際比較(日本：2016年、アメリカ：2017年、ヨーロッパ：2004年)



6 育児休業取得率の推移(男女別)



7 研究者に占める女性割合の国際比較(2018年)

(5～7：内閣府・男女共同参画推進連携会議「ひとりひとりが幸せな社会のために」2019(令和元)年版より作成)

用機会均等法が成立し、以後女性の就労環境を改善する法律が整備されていった[3 5 6 7]。また「女らしさ」「男らしさ」[4]の規範を支える家族制度が批判の対象となり、家族の多様化が始まった。そして90年代以降は、個人のライフスタイル、家族の生活様式は多様化した。「家族は一体」という見解は弱まり、「家族は個人の集合体」とみなされる傾向が強まった。晩婚化、高齢出産、少子化が進み、非婚同居・婚姻外での出産も増え、子どもや配偶者をもたない生活スタイルも一般化している。

また、伝統的な性的役割をおしつけるのではなく、各人の個性を尊重すべきことへの理解も進みつつある。性的な志向についても、本人の意思を尊重して、多様な性のあり方を受け入れるような社会のあり方が模索されている。そして、同性婚を法的に認める国も増えつつある。こうした傾向をふまえ、たとえば2006年のドイツの第七家族報告書は、家族を「夫婦と子ども」ではなく、「異なる世代がおたがいに責任を引き受ける共同体」と定義している。

Q1 資料３～７を参考に、現代の日本とほかの国々における家族のなかの女性の役割を比較してみよう。また、テーマを設定して関連する資料を調査し、まとめてみよう。

Q2 今日、様々な家族像が描かれるが、なぜ家族のあり方を問題として取り上げる必要があるのかを考えてみよう。

文字資料や数値からも考察できるように工夫しました。

第Ⅰ部

諸地域の歴史的特質の形成

第Ⅰ部では、オリエント文明などの古代文明の誕生から東アジアと中央ユーラシアをはじめとする諸地域ごとの歴史の様相や展開について取り扱う。

その際、生業、身分、階級、王権、宗教、文化・思想などに着目して考察する。

たとえば王権に着目すると、古代エジプトの王は神権政治をおこない、宗教的な儀式や祭事を取りおこなった。中国の王は戦いを繰り返しながら、集権的な統治の仕組みを整えた。ローマ皇帝は市民たちの支持を獲得する政策を積極的におこない、広大な領域の長期的な支配を可能にした。アッバース朝の君主は、民族の別なくイスラーム教徒の平等を保障し、商業活動を重視することで、国家の繁栄をもたらした。

前7000頃 農耕・牧畜の開始

前6000頃 黄河・長江流域で農耕開始

前3000頃 エジプトに統一国家成立

前2700頃 メソポタミアに都市国家成立

前2600頃 インダス文明の成立

前1000頃 マヤ文明の成立

前8世紀頃 ギリシアでポリス成立

前317頃 マウリヤ朝成立

前334 アレクサンドロス大王の東方遠征開始

前221 秦の中国統一

前202 漢(前漢)建国

前27 アウグストゥス、元首政(帝政)開始

395 ローマ帝国の東西分裂

618 唐建国

622 ムハンマドのヒジュラ

750 アッバース朝成立

800 カール大帝戴冠

962 神聖ローマ帝国成立

前1333年頃

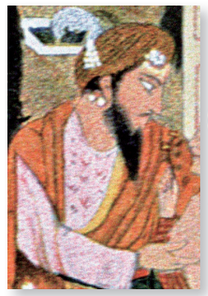
ツタンカーメン王即位
古代エジプトの少年王。宗教改革がおこなわれた混乱期(▶p.32)に即位した。「王家の谷」にある墓の副葬品がほぼ完全な形で出土したことにより、広く知られる。

前202年

劉邦即位 古代中国の農民の出身であったが、おおらかで人望が厚かった。やがて漢(▶p.45)を建国したが、急激な統一政策はひかえた。

98年

トラヤヌス帝即位
ローマ帝国の五賢帝の１人(▶p.74❸)。みずから兵を率いて遠征を繰り返した。現在のルーマニアまで進出し、ローマ帝国の最大領域を実現した。



786年

ハールーン＝アッラシード即位 イスラーム教徒の平等を確立したアッバース朝最盛期のカリフ。バグダードの繁栄をもたらした(▶p.81)。

各部の部扉は、その**部の概観と学習の視点**を示し、「部へのアプローチ」と関連させた年表や図版を取り上げています。

古代の諸地域において活動した人々の特色をあげてみよう

資料は紀元前2600年頃のシュメールの古代都市ウル（現在のイラクにある）の遺跡から出土した横長の箱である。「スタンダード（Standard、旗章、軍旗）」と呼ばれているが、その実際の用途は明らかになっていない。スタンダードには、様々な人物のモザイクがほどこされている。ここに描かれた人々の特色から、古代の社会や暮らしについて考えてみよう。

►p.31

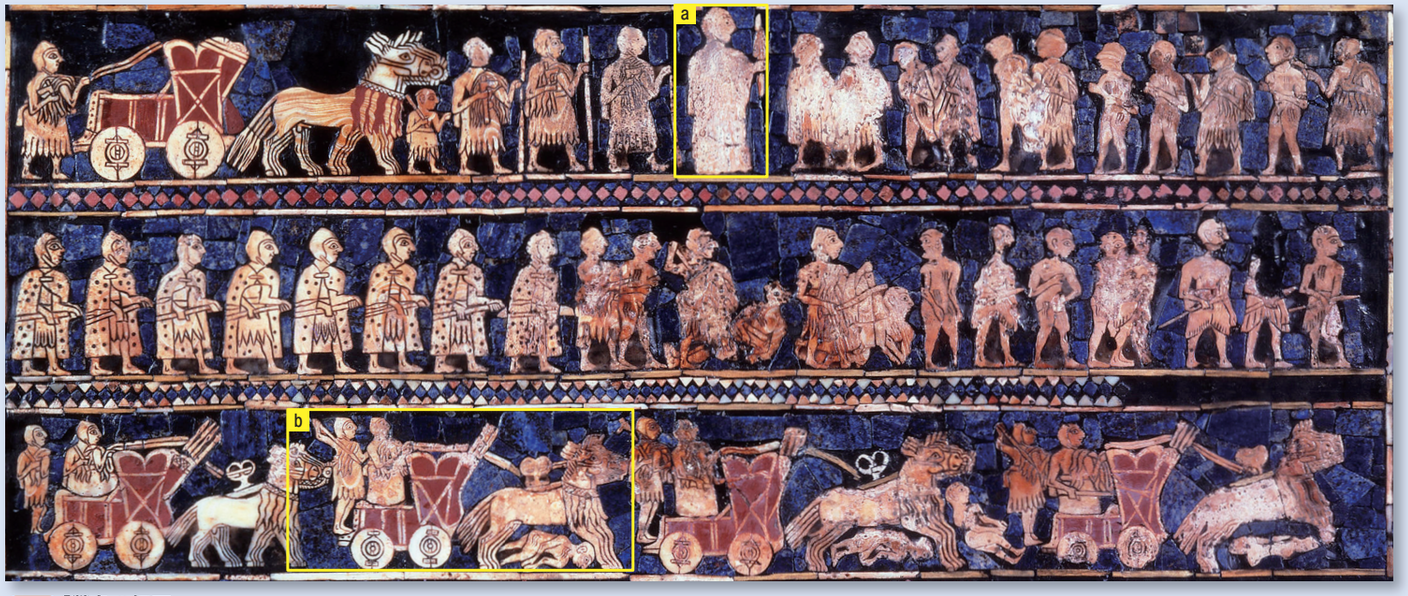
生徒自身で問いを表現する「アプローチ」

第Ⅰ部～第Ⅲ部の冒頭に、各部の学習の目的を明確化する「第○部へのアプローチ」を設けました。

資料1 **ウルのスタンダード**
発見者であるイギリスの考古学者レオナード＝ウーリーの説にしたがって「スタンダード」と呼ばれている。

戦争の場面

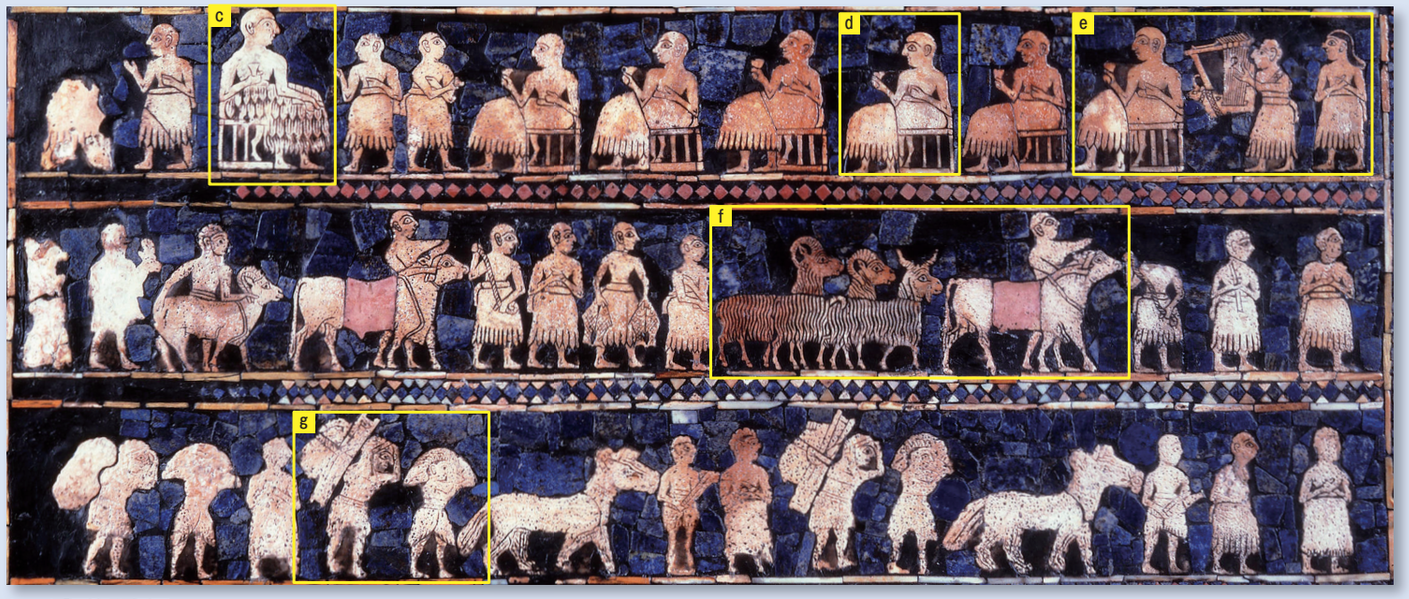
右の場面は下段から中段、上段へと時間の流れを追っていくように構成されている。下段は四頭立ての四輪戦車が描かれている。戦車を率いている動物は馬ではなく、半ロバ（オナガー）である可能性が高い。左端の半ロバは並足だが、右へ行くほど前足が上がっていることから、１台の戦車がしだいに速度を増していく様子とも考えられている。中段には兵士たちが描かれている。左側の兵士は冑をかぶりマントを身につけているが、右側の兵士たちの身なりはどうであろうか。中段はどのような場面を描いているのだろう。上段の大きく描かれた人物が中央で、右側からやってくる人物達を待ち受けている。



資料2「戦争の場面」

平和の場面

右の場面は「戦争の場面」と結びつけて戦争に勝利したあとの「祝宴の場面」と考えられてきたが、現在では宗教的な意味をもった場面とされ、「平和の場面」や「饗宴の場面」といわれる。穀物を入れた袋などが運ばれている。中段には牛やヤギ、羊のほかに魚なども描かれている。右端の２名の人物は、胸の前で手を組む恭順の仕草を示し行列を導いている。なぜ、このような産物が運ばれているのだろう。上段には、ひときわ大きく描かれ立派な腰巻きを身につけている人物と向かい合って座る６人の男性が杯を手にしている。



資料3「平和の場面」

Q1 人々はどのような仕事に従事し、どのような生活を送っていたのだろうか。たとえば、図ｂ・図ｆの人々はどのような生活を営んでいるのか考えよう。ほかにも興味のある人物をあげてみよう。

図ｂ

図ｆ

Q2 どのような身分の人がいるだろうか。たとえば、図ａ・図ｆの人々はどのような身分だと考えられるだろうか。２人とは異なる身分だと思う人物もあげてみよう。

図ｄ

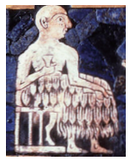
図ｇ

Q3 図ｅは剃髪した人物や楽師、男性歌手が描かれていることから、宗教的な集まりであると考えられている。人々は神に何を願い、また、感謝したのだろうか。

図ｅ

Q4 図ａと図ｃの王は何をしているのだろう。王にはどのような役割があったのだろうか。

図ａ



図ｃ

Q5 さらに調べたいことを問いにしてみよう。

第1章

文明の成立と古代文明の特質

世界各地で、自然環境にもとづいて多様な古代文明が成立し、そのもとでは王などの権力者を中心とする社会や文化も形成された。古代文明において、王は人々にとってどのような存在であったのだろうか。

問いを主体とした展開 ①
章の冒頭に、**章全体の学習内容をまとめた概観**と、それを**理解するためのヒントとして「問い」**を設けています。

問いを主体とした展開 ②
節冒頭に「問い」を設け、その節の**学習目的を明確化**しています。

1 文明の誕生

各地で始まった農耕と牧畜は、人々の暮らしをどのようにかえたのだろうか。

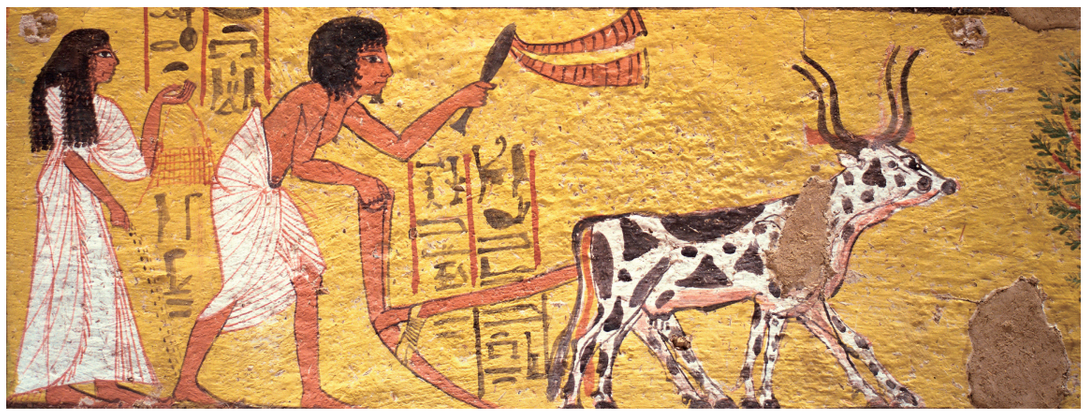
農耕と牧畜のはじまり

約1万年前に氷期が終わると地球は温暖化し、自然環境が大きく変化したため、新人は地域ごとの多様な環境に適応していった。▶p.15 そのなかでもっとも重要だったできごとは、約9000年前の西アジアで、麦の栽培とヤギ・羊・牛などの飼育が始まったことであった。これが**農耕**[2]・**牧畜**の開始である。これにより人類は積極的に自然環境を改変する能力を身につけ、食料を生産する生活を営みはじめた。人類史は、狩猟・採集を中心にした**獲得経済**から、農耕・牧畜による**生産経済**に移るという重大な変革をとげたのである。その結果、人口は飛躍的に増え、文明成立の基礎が築かれた。

農耕・牧畜が始まると、人類は集落に住み、織物や土器[3]をつくり、また石斧・石臼などの**磨製石器**[1]を用いた。**新石器時代**の始まりである。このような初期農耕民の新石器文化は、アジア・ヨーロッパ・アフリカの各大陸に広がった。

図版に番号を付け、関連する本文にも番号を付けました。

[1] **磨製石器**　砥石を使って表面を磨いた石器。研磨の技術は新石器時代の農耕開始とともに発達し、石斧・石臼などが製作・使用された。



[2] **農耕をおこなう男女**　牡牛に犂を牽かせて土地を耕す男性と、その後につづいて種をまく女性。前1200年頃のエジプトの壁画。

[3] **彩文土器**　表面に彩色文様をつけた土器を彩文土器という。貯蔵やビール・ワインなどの酒器として用いられたが、模様は左のような幾何学文から徐々に右のように動物も描かれるようになっていった。

Q なぜ幾何学文だけでなく、動物も描かれるようになったのだろうか。考えてみよう。

問いを主体とした展開 ③
本文の理解を深めるために、図版などの資料にも「問い」を付けています。

文明の成立

初期の農耕は雨水だけに頼り、また肥料を用いない方法によっていたため、収穫が少なく、耕地もかえていかなくてはならなかった。しかし、メソポタミア（ほぼ現在のイラクにあたる）をはじめとする地域で**灌漑農業**❶が始まると食料の生産力は高まり、余裕が生まれるにつれて貧富の差の拡大や仕事の分業化が進んだ。こうして権力者が多くの人々を統一的に支配する**国家**という仕組みが生まれた。ナイル川、ティグリス川・ユーフラテス川、インダス川、黄河・長江の各流域には高度な**文明**[4]が誕生し、やや遅れてアメリカ大陸にも独自の文明が形成された。▶p.32 ▶p.30 ▶p.35 ▶p.37 ▶p.40

こうした文明においては、宗教や交易の中心である**都市**が生まれた。武器や工具などの**金属器**がつくられ、また多くの文明では政治や商業の記録を残すための**文字**が発明された。ここから人類史は、歴史時代に入っていった❷。

❶堤防や水路で川の流れをコントロールし（治水）、農作物をつくるために水を引いて土地を潤して耕作する農業のこと。

❷16世紀頃に始まる「世界の一体化」（▶p.130）の以前にも、世界各地では言語や宗教を共通の基盤として、独自の特徴をもつ文化的なまとまりが形成されていた。本書では、こうしたまとまりを「東アジア世界」「地中海世界」などの表現を用いて示している。

1 まとめ　文明の誕生は人々の関係をどのようにかえたのだろうか。

[4] **おもな古代文明とその遺跡**

問いを主体とした展開 ④
節末の「問い」は、その**節のまとめ**や、**さらに生徒に考えさせる発展的な内容**にしています。

ゴチックは**必要最低限**にとどめ、おさえておきたい基本用語が分かるようにしました。

② 古代オリエント文明とその周辺

古代オリエント文明やエーゲ文明の王は、どのように人々を支配したのだろうか。

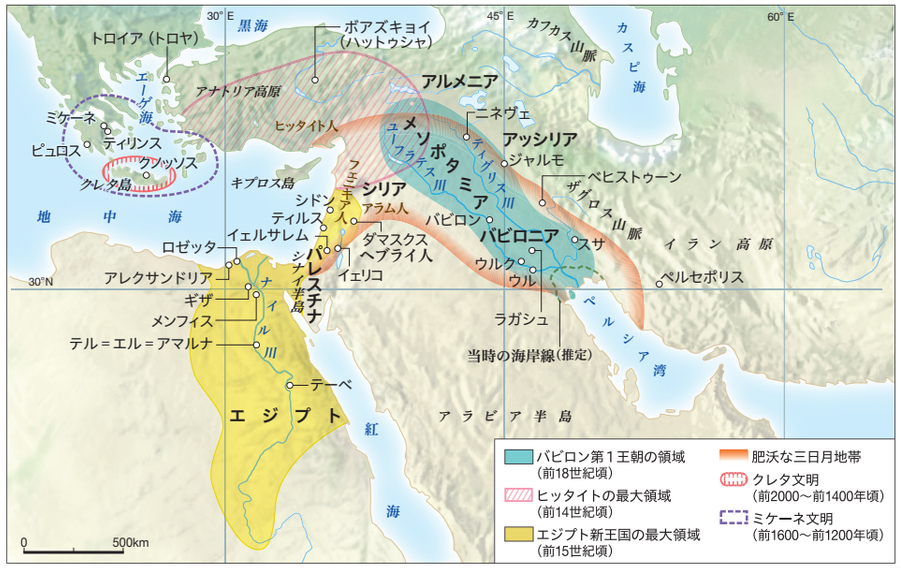
オリエント世界と東地中海沿岸の風土と人々

オリエント2とはヨーロッパからみた「日ののぼるところ、東方」を意味し、西アジアからエジプトにかけての地域を指す。乾燥して気温が高いために、砂漠・草原・岩山が多い。羊やラクダを飼育する遊牧生活に加えて、沿海や河川流域の平野、あるいはオアシスで、小麦・大麦・豆類・オリーヴ・ナツメヤシなどを栽培する農業が営まれてきた。とくにティグリス川・ユーフラテス川流域の**メソポタミア**1やナイル川流域の**エジプト**など大河の流域では、定期的な増水を利用して早くから灌漑農業がおこなわれ、王が神やその代理人として大きな権力をもつ**神権政治**がおこなわれた。

オリエントの西に広がる地中海沿岸部は、重要な交通路として古くから1つの文化的まとまりを形成し、そこには様々な文明が発達した。地中海一帯は冬に少量の雨がふるものの、夏は乾燥し、陸地はやせた石灰岩の丘が連なっている。そのため、オリーヴなどの果樹栽培や羊の牧畜がおもな生業であった。

❶シリア・パレスチナ地方からメソポタミアに至る農耕文明の成立地帯は「肥沃な三日月地帯」と呼ばれる。

1 シュメールの高官像　シュメールの人物像は祈りをささげる姿で表現されたものが多く、宝石のラピスラズリで装飾された青い眼が印象的である。



2 古代オリエント世界と東地中海沿岸
Q様々な王朝が興亡したメソポタミア地方は、どのような地形をしているのだろうか。

発展的な問いは、**グループで意見交換**し、興味・関心を高めることができるよう工夫しました。

シュメール人の都市国家とメソポタミアの統一

メソポタミア南部では、前2700年頃までにウル・ウルクなど**シュメール人**1の**都市国家**3が数多く形成された。これらの都市国家では、王を中心に、神官・役人・戦士などが都市の神をまつり、政治や経済・軍事の実権を握って人々を支配する階級社会が成立した。

前24世紀頃、**アッカド人**がメソポタミア南部の都市国家をはじめて統一した。その統一国家が崩壊したあと、前19世紀初めにアムル人が**バビロン第1王朝**をおこし、**ハンムラビ王**（前18世紀頃）のときに全メソポタミアを支配した。王は運河の大工事をおこなって治水・灌漑を進め、また**ハンムラビ法典**を発布して、法にもとづく強力な政治をおこなった。

早くから鉄器を使用した**ヒッタイト人**は、前17世紀半ば頃アナト

3 ジッグラト　都市国家ウルの遺跡に復元されたジッグラト（聖塔）。塔の上には都市の守護神をまつる祭壇があった。
Q王が壮大な神殿をつくった目的は何だったのだろうか。

「探究しよう」は、**本文の記述をさらに深め、生徒の想像力や考察力を養うテーマ**を取り上げました。

探究しよう　ハンムラビ法典は何を定めたのだろうか

ハンムラビ王は首都バビロンで神の代理として統治をおこない、それまでの法慣習を集成して法典を定めた。

53.　自分の耕地の畔の強化をおこたったため、畔に亀裂が生じ、灌漑水で耕地を流出させたなら、自分の耕地に亀裂を生じさせた人は、流出させた穀物を償わなければならない。
104.　商人が販売人に商品を販売のために与えたなら、販売人は商人に定期的に銀を返さなければならない。販売人は、彼が商人に与える銀の領収書を受け取らなければならない。
108.　居酒屋の女主人がビールの対価として穀物を受け取らず、銀を大きな分銅で計って受け取り、その結果穀物の販売価格に対するビールの販売価格をつり上げたなら、彼らはその女主人の不法行為を立証しなければならない。
196.　他人の目をつぶしたならば、自分の目をつぶさなければならない。
199.　他人の奴隷の目をつぶしたり、他人の奴隷の骨を折ったならば、奴隷の値段の半額を支払わなければならない。
264.　牛あるいは小家畜の放牧を委託された牧夫が、全労賃を受け取って満足し、牛や小家畜の数を減らしたり、その出産を少なくしたら、彼は契約にしたがって小家畜の子供と産物を与えなければならない。

（中田一郎訳『ハンムラビ「法典」』一部改変）

資料1 **ハンムラビ法典**

資料2 **ハンムラビ法典碑（左）と楔形文字**
法典の序文には「正義を国土に表すため」に制定されたと記されている。左の図で王座に座る太陽神（右）に従うポーズをとっているのがハンムラビ王。

Q1 当時はどのような職業があったのだろうか。
Q2 農耕・牧畜が始まったことで、どのような問題がおこっているのだろうか。
Q3 196・199条などを参考にすると、刑罰の基本となる考えは何だろうか。また、なぜ王はこのような法典を制定したのだろうか。
Q4 ハンムラビ法典の各法文は、現代社会においてどこまでなら適用できるだろうか。話し合ってみよう。

ハンムラビ法典碑

第6章

イスラーム教の伝播と西アジアの動向

7世紀のアラビア半島に誕生したイスラーム教は、その後世界各地に広まっていった。イスラーム教が広まった地域と、どのような方法で広まったかについて、考えてみよう。

図版・注の番号は、節ごとで通しています。

1 **トルコ系騎馬戦士像**　トルコ系の騎馬戦士は、騎射を得意とした。退却しながらの騎射は、遊牧戦士の常道でもあった。

1 イスラーム教の諸地域への伝播

イスラーム教はどのような人々の活動によって各地に伝播したのだろうか。

中央アジアのイスラーム化

8世紀初め、アラブ＝ムスリムの遠征軍が中央アジアのオアシス地域を征服すると、この地の人々はイスラーム教に改宗していった。さらにアラブ軍は、751年に**タラス河畔の戦い**で唐軍を破り、やがて中央アジア・イラン東北部には、アッバース朝の地方政権としてイラン系の**サーマーン朝**（875〜999）が成立した。サーマーン朝は、すぐれた騎馬戦士1であった草原地帯のトルコ人を、マムルーク（奴隷軍人）としてカリフの親衛隊に供給した。

一方、9世紀半ばにウイグルが滅亡したあと、中央ユーラシアではトルコ系遊牧集団の西進2が活発化した。彼らがたてた**カラハン朝**（10世紀半ば〜12世紀半ば頃）は、イスラーム教を受け入れた1のち、10世紀末にサーマーン朝を倒して中央アジアのオアシス地域にも進出した。こうして中央アジアではトルコ語を話す人々が増え、この地域は「**トルキスタン**（トルコ人の土地）」と呼ばれるようになった。

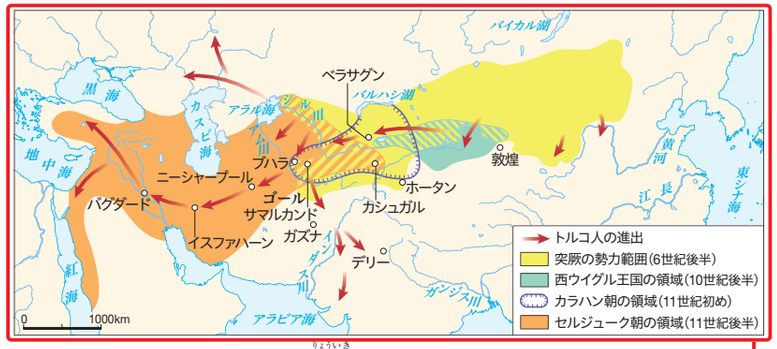
1 トルコ人のイスラーム化は、サーマーン朝による征服や布教者の活動、ムスリム商人との接触、遊牧君主の改宗に臣下が従うなど、様々な形で進んだ。

南アジアへのイスラーム勢力の進出

ヴァルダナ朝の滅亡後、南アジア各地に様々な勢力が割拠するなかで、10世紀末から、アフガニスタンを拠点とする**ガズナ朝**（977〜1187）や、ガズナ朝から独立した**ゴール朝**（1148頃〜1215）が北インドへの軍事侵攻を繰り返した。そして、13世紀初めには、最初のイスラーム王朝である奴隷王朝2 3（1206〜90）が誕生した。この王朝も含めて、その後デリーを本拠にしたイスラーム系の5王朝は、**デリー＝スルタン朝**（1206〜1526）と呼ばれる。

2 奴隷軍人出身であるゴール朝の将軍アイバク（在位1206〜10）がデリーに創始した。

イスラーム勢力の進出により、初期にはヒンドゥー教寺院が破壊されることもあったが、現実の統治でイスラーム教が強制されることはなかった。イスラーム教の教えは、神への献身を求めるバクティや苦行を通じて神との合体を求めるヨーガなどのインド古来の信仰とも共通性があったために、都市住民やカースト差別に苦しむ人々のあいだに広まった。ヒンドゥー教とイスラーム教の要素を融合した都市が建設され、サンスクリット語の作品がペルシア語へ翻訳されるなど、**インド＝イスラーム文化**が誕生した。



2 **トルコ人の西進とトルコ系諸国の領域**
Q トルコ人は進出した社会でどのような役割を担ったのだろうか。

3 **クトゥブ＝ミナール**　アイバクによって、征服の記念碑としてデリー近郊に建てられた塔。高さ72.5m。

地図はカラーユニバーサルデザインに則り、読みやすい配色や線種で作製しています。

東南アジアの交易とイスラーム化

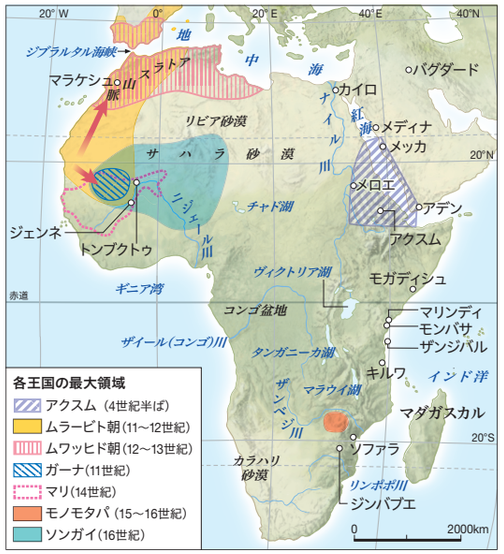
8世紀頃になると、ムスリム商人は海路を経て中国沿岸にまで進出しはじめた。しかし、黄巣の乱で広州が破壊されたため、彼らはマレー半島まで撤退した。一方、唐による国際秩序がゆるんで朝貢貿易が不振になったことから、中国の商人は**ジャンク船**で東南アジアに進出するようになった。

10世紀後半になると、チャンパーや三仏斉などが宋に朝貢し、ムスリム商人も広州や泉州などに居留地をつくり、交易が活発になった。13世紀後半、モンゴルの元朝が東南アジアへ進出し、ベトナムの陳朝（1225〜1400）はこれを退けたが、ビルマのパガン朝は滅亡した。他方、ジャワでは元軍の干渉を排し、ヒンドゥー王朝の**マジャパヒト王国**（1293〜1520頃）が成立した。元軍の侵攻はあったものの、陸と海の交易路の発展は東南アジアにもおよんだ。

こうした交易ネットワークの拡大を背景に、東南アジアにはイスラーム教が広まっていった4。13世紀に諸島部を中心にムスリム商人や神秘主義教団が活動し、同世紀末にはスマトラ島に最初のイスラーム王朝が成立した。

マラッカ王国（14世紀末〜1511）は、15世紀に国際交易都市として

4 **東南アジアへのイスラーム教の伝播**　東南アジアでは、15世紀以降諸島部にイスラーム教が広まった。
Q なぜイスラーム教はこのようなルートで広まったのだろうか。



5 16世紀までのおもなアフリカの国々

発展した。この王国は、明との朝貢関係を利用してタイのアユタヤ朝の影響力を排除した。しかしその後、明は対外活動を縮小させたため、かわりにマラッカ王はイスラーム勢力との関係を強化することでタイの侵攻を阻止した。こうして有力化したマラッカ王国を拠点に、イスラーム教は東南アジアの諸島部に広まった。イスラーム王朝として、スマトラでは**アチェ王国**（15世紀末～1903）が、ジャワでは**マタラム王国**（1580年代末頃～1755）が成立した。

►p.123 ►p.127

アフリカのイスラーム化

イスラーム教の成立以前、エチオピアではキリスト教徒の**アクスム王国**（紀元前後頃～12世紀）5が、ナイル川流域と紅海方面を結ぶ金や奴隷、象牙を扱う交易で栄えていた。またアフリカ東岸の海港は、アッバース朝やファーティマ朝の繁栄とともに活性化し、金や香料、象牙などが東アフリカから輸出された。モガディシュ・マリンディ・キルワなどの海港に住みついたムスリム商人は、季節風を利用してダウ船を操り、広大なインド洋海域を結ぶ交易ネットワークに参加していった。やがて海港の連なる海岸地方では、アラビア語の影響を受けた**スワヒリ語**3が共通語として用いられるようになった。

►p.82 ►p.7

西アフリカでは**ガーナ王国**（7世紀頃～13世紀半ば頃）が、サハラ北部の岩塩と自国の金を交換する、ラクダを用いた隊商交易で栄えていた。北アフリカのイスラーム化後、ファーティマ朝などで金の需要が増したため、ムスリム商人による塩金交易は大きく発展した。ガーナ王国が11世紀後半にムラービト朝の攻撃を受けて衰退すると、西アフリカのイスラーム化が進み、その後におこった**マリ王国**（1240～1473）6や**ソンガイ王国**（1464～1591）の支配階級はイスラーム教徒であった。ソンガイ王国は西アフリカの隊商都市の大部分を支配し、北アフリカとの交易で栄えた。とくにニジェール川中流の交易都市**トンブクトゥ**は、アフリカ内陸部におけるイスラーム教の学問の中心地として発展した。

►p.100

3スワヒリ（サワーヒリー）とは、アラビア語で「海岸地方に住む人々」を意味する。スワヒリ語は現在ケニアやタンザニアなどで公用語として用いられている。

6 **マンサ＝ムーサ**　14世紀に出たマリの国王。メッカ巡礼の際、途上でラクダ100頭に積んだ莫大な黄金を惜しげもなく使い、王国の豊かさを知らしめた。
Q マリ王国の繁栄の要因は何だろうか。

1 まとめ　イスラーム教の拡大と、軍事・商業の活動にはどのような関係があったのだろうか。

節末の「問い」は、その節のまとめや、さらに生徒に考えさせる発展的な内容にしています。

探究しよう　イスラーム文化の多様性をモスクから考えてみよう

7世紀のアラビア半島に生まれたイスラーム教は、やがて世界各地に伝播していった。それとともにイスラーム文化が広まってゆく。それは教義や儀礼、法、暦、アラビア文字などの共通性を備えるとともに、各地の伝統や文化と融合して多様な姿をみせることになった。

教科書のp.82には、モスクの一般的な機能と構造が示されている。しかし、個々のモスクをみると、そこには各地の伝統的な建築文化が反映され、その姿は様々であることがわかる。

資料1 **イマームのモスク**（イスファハーン、イラン）

資料2 **スレイマン＝モスク**（イスタンブル、トルコ）

資料3 **清真寺**（西安、中国）

資料4 **ジェンネのモスク**（ジェンネ、マリ）

Q1 資料1～4は各地の代表的なモスクである。それぞれのモスクに使用されている建築材料は何だろうか。

Q2 イスラーム文化が各地の伝統や文化を受け入れ、それらと融合してきたとすれば、それはこの4つのモスクのどんなところに見出すことができるだろうか。

世界各地のモスクの写真を用意し、比較・考察ができるよう工夫しました。

2 西アジアの動向

イスラーム勢力の拡大は、西アジアや北アフリカ・イベリア半島の社会にどのような影響を与えたのだろうか。

トルコ系遊牧民の西アジア進出とセルジューク朝

中央アジアの遊牧民であったトルコ人は騎馬戦士としてすぐれていたので、アッバース朝時代の9世紀頃から**マムルーク**1として登用され、彼らを活用する手法は各地のイスラーム政権に広まった。

►p.94

つづいて11世紀には、トルコ系の遊牧部族が中央アジアから西進して**セルジューク朝**（1038～1194）をたてた。彼らは1055年にブワイフ朝を追ってバグダードに入城し、アッバース朝カリフから**スルタン**（支配者）の称号を授けられた。セルジューク朝は、統治にあたってニザーム＝アルムルクらイラン人を登用し、スンナ派の神学を奨励して、マドラサ（学院）（1018～92）を各地につくった。

►p.83

1 **マムルーク**　マムルークは馬上で槍・弓・剣などを扱う軍事訓練をほどこされた。

④ オランダ・イギリス・フランスの台頭

オランダ・イギリス・フランスの国制は、それぞれどのような特徴をもっていたのだろうか。

オランダの繁栄とイギリス・フランスの挑戦

ネーデルラントは、中世から漁業・農業・毛織物業でヨーロッパ諸国をリードしていた。またバルト海地域から穀物を輸入し、かわりに西ヨーロッパの産品を輸出する中継貿易で栄えた。北部のオランダは独立後、首都の**アムステルダム**を中心に、17世紀には造船・金融でもヨーロッパをリードした[2]。こうした繁栄のもと市民が文化の保護者となり、独立戦争の背景から宗教的には寛容なため、学問においてもヨーロッパの中心となった。

▶p.147

オランダは特権を認めた**東インド会社**(1602年設立)[1]などの貿易会社を担い手に、世界各地に進出した。ポルトガルやイギリスの勢力を排除して、ジャワ島のバタヴィア(現在のジャカルタ)を拠点に香辛料交易を独占した。またポルトガルにかわって日本との交易を維持し、同地より大量の銀をもちだした。さらに北米大陸に進出し、ニューアムステルダム(現在のニューヨーク)を中心とする植民地を建設した[3]。

▶p.139

海洋大国となったオランダに対抗し、イギリスは17世紀後半のイギリス＝オランダ戦争でニューアムステルダムを奪い、フランスは侵略戦争によってオランダ本土の半分を一時占領した。イギリスの名誉革命によって、オランダはイギリスと同君連合を築いてフランスに対抗したが、18世紀には海軍力が制限され、オランダの国力は衰退しはじめた。

❶国王の権力は神に直接由来し、人民はもちろん、神聖ローマ皇帝やローマ教皇からも干渉されないとする理論。16世紀末にとなえられ、成立期の絶対王政を支えた。

1 オランダ東インド会社のマーク入りの皿
皿に描かれたVOCの文字は社名を記号化した社章。

(年)	ポルトガル	オランダ	イギリス	フランス
1650~59	35	205	81	6
1660~69	21	238	91	24
1670~79	25	232	131	30
1680~89	19	204	142	35
1690~99	24	235	80	36
1700~09	22	281	120	38
1710~19	20	310	127	41
1720~29	19	382	149	55
1730~39	24	375	154	109
1740~49	27	314	184	124
1750~59	28	290	191	135
1760~69	16	292	242	105
1770~79	13	290	229	194
1780~89	15	298	292	303
1799~99	-	119	177	196

(羽田正『東インド会社とアジアの海』より作成)

2 東インド向けヨーロッパ船の数(隻数)
Q 17世紀後半から18世紀後半にかけて、各国の海運力はどのように変化したのだろうか。その背景も考えてみよう。

イギリスの革命

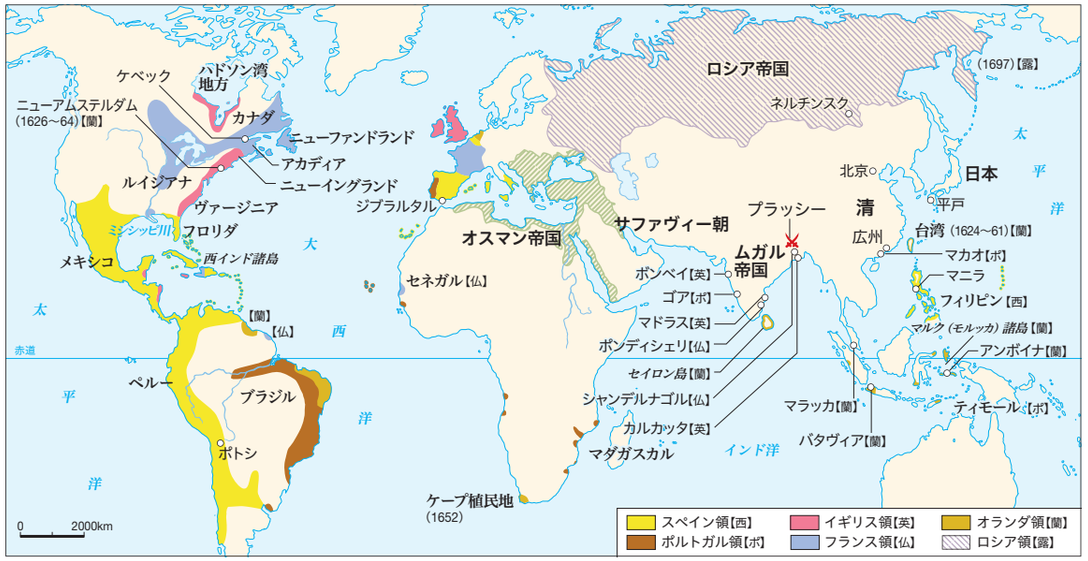
イギリスでは1603年、スコットランド出身のステュアート家が王位を継いで、ジェームズ1世が即位した(ステュアート朝)[4]。王は**王権神授説**❶をとなえ、議会を軽視した。つぎのチャールズ1世は専制を強めたため、議会との対立が深まった。国王が強硬手段によって議会を抑えようとすると、革命が勃発した。この革命は、王党派に対立した議会派のなかに、信仰を迫害されていたピューリタンが多かったため、ピューリタン革命とも呼ばれる。

在位1603~25　1603~49、1660~1714　在位1625~49

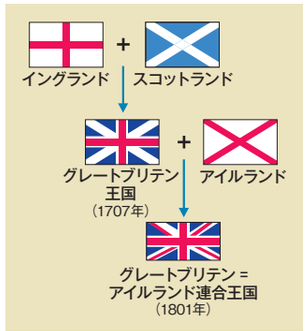
▶p.145

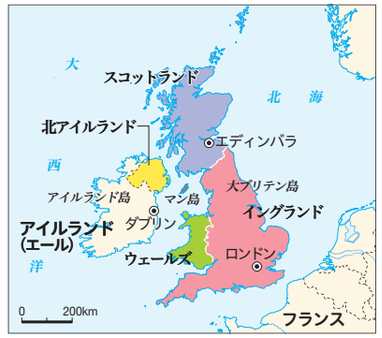
議会派は、**クロムウェル**(1599~1658)の指導のもとで勝利し❷、1649年に国王を処刑して、**共和政**を開始した。動乱のさなか、**ホッブズ**(1588~1679)は『リヴァイアサン』[5]を著して、無政府状態の混乱を防ぐためには、絶対的な権力も必要だと説いた。この時期のイギリスでは、オランダに対抗するために、産業を育成し、高関税によって貿易収支の黒字と税収を増やすことをめざす**重商主義政策**がとられた。そこで、オランダ船の排除を目的とした**航海法**(1651)が制定され、その結果3次にわたる**イギリス＝オランダ(英蘭)戦争**(1652~54、65~67、72~74)が勃発した。一方、共和政は安定せず、クロムウェルは軍事独裁体制をしいた。国民は彼の厳格な統治

❷またクロムウェルは、王党派と結んでいたアイルランドとスコットランドを征服し、アイルランドではカトリック勢力の土地を大規模に奪って、議会派の軍事費をまかなった。



3 17世紀半ばのヨーロッパ諸国の植民地





4 イギリス国旗の変遷　イングランド・スコットランド両国王となったジェームズ1世は統一旗を作成させ(1707年正式に制定)、これにアイルランドをあわせたものが連合王国の国旗のもとになっている。
Q 年代を参考に、誰の時代に何がおこったか調べてみよう。

5 ホッブズ『リヴァイアサン』の扉絵　王の体には多くの国民が描かれている。

地図・図版を豊富に掲載しています。

表やグラフを多数用意し、経済の視点からも考察ができるよう工夫しました。

19世紀の国際的な人々の移動について考えてみよう

1825年に、イギリスでストックトン－ダーリントン鉄道が開通し、以後急速に鉄道網が発達した。鉄道建設はヨーロッパ諸国にも広がり、フランスやドイツなどは1870年代には営業距離数でイギリスに追いついている。また、19世紀初めに試作された蒸気船は、風に左右されずに航行できたため、19世紀後半から20世紀初めにかけて、帆船にかわって海運の主力を担うようになった。

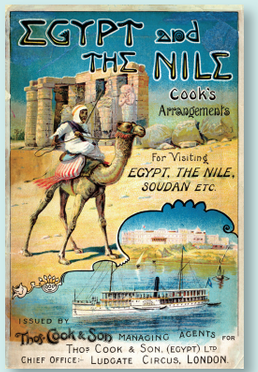
こうして、19世紀には産業革命と並行して交通革命がおこり、国際的な人の移動が盛んになった。人々はなぜ外の世界へと移動したのだろうか。そして、この時代の国際的な人の移動は、その後の世界にどのような影響をおよぼしたのだろうか。

旅行の大衆化

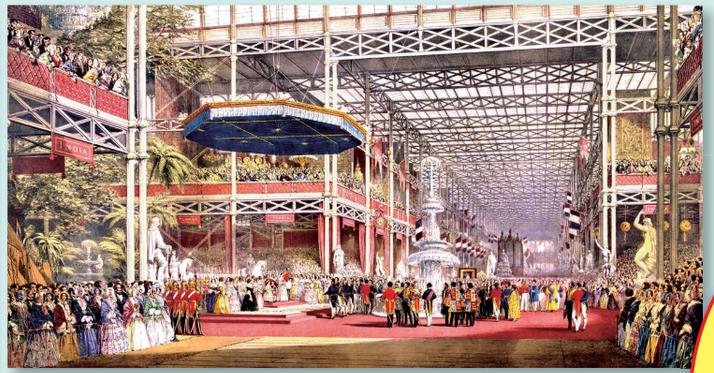
18世紀のイギリスで、旅行は上流階級の特権であったが、ヴィクトリア女王の時代になるとしだいに大衆化していった。▶p.179

トマス＝クック（1808～92）は、1841年に鉄道会社と提携して、世界最初の団体旅行を企画し、成功を収めた。彼は旅行の大衆化を追求し、51年のロンドン万国博覧会でも団体割引のパック旅行をうちだし、多くの人々をロンドンに運んだ。さらに、海外旅行も企画するようになったが、19世紀の段階では運賃が高額であったため、庶民の旅行は地理的に近い範囲に限られていた。

20世紀に入ると、旅行者の数や距離が大幅に伸び、庶民の娯楽として定着していった。



資料1 **トマス＝クックのポスター**（1808年）



資料2 **ロンドン万国博覧会**
第１回万国博覧会には34カ国が参加し、入場者数は、会期141日間で約604万人を数えた。

資料3 **『80日間世界一周』の旅行路**
『80日間世界一周』（1872年）はフランスのジュール＝ヴェルヌの小説。あるイギリス人が「80日間」で世界一周ができるかという賭けをして、フランス人の召使とともに世界一周の旅に出るという物語。地図は彼らの旅行路（ロンドン→ボンベイ→カルカッタ→香港→横浜→サンフランシスコ→ニューヨーク→ロンドン）。この年、トマス＝クックはこの小説の逆ルートでの世界一周旅行を企画した。

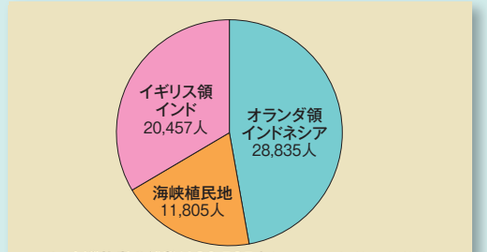
第Ⅲ部では、交通の発達や人々の国際的な移動について取り上げ、地図やグラフなど資料も多数掲載しています。

メッカ巡礼

イスラーム教では、メッカ巡礼は信者がおこなうべき５つの義務の１つであるが、遠い国からメッカを訪れることは容易ではなかった。南アジアや東南アジアからの巡礼者は、アラブ系商人のネットワークを利用していたが、1870年代以降、蒸気船を利用する海運業が発達すると、この新しい交通手段を利用し、多くのイスラーム教徒がメッカを訪れるようになった。そして、1920年代になると、メッカ巡礼者の多くが南アジアや東南アジア出身者で占められるようになった。

資料5 **1880年代のメッカ巡礼**
1870年代以降、南アジアや東南アジアからのメッカ巡礼者の数が爆発的な増加をみせた。

資料6 **スマトラ島のアチェからのメッカ巡礼者**（1880年代）
アチェでは反オランダ意識が強く、1873年からアチェ王国とオランダとのあいだで戦争が生じたが、1904年にオランダに併合された。



＊メッカ巡礼者の総数は86,525人（1926～31年〈年平均値〉）
（Kris Alexanderson, *Subversive Seas: Anticolonial Networks across the Twentieth-Century Dutch Empire* および J. Vredenbregt, "The Haddj. Some of its features and functions in Indonesia" より作成）

資料7 **南・東南アジアからのメッカ巡礼者数**（1926～31年〈年平均〉）

航路	ケープ岬経由	スエズ運河経由
ロンドン－ボンベイ	10,667	6,274
ロンドン－カルカッタ	11,900	8,083
ロンドン－シンガポール	11,740	8,362
ロンドン－香港	13,180	9,799
ロンドン－シドニー	12,690	12,145

（宮崎犀一ほか編『近代国際経済要覧』より作成）

資料4 **スエズ運河開通による航路ごとの距離**（単位：マイル）

Q1 庶民のあいだに旅行が娯楽として定着し、海外旅行も盛んになったのには、どのような背景があっただろうか。

Q2 欧米社会での海外への人々の移動が盛んになったことは、その後の世界にどのような影響をおよぼしただろうか。

Q3 1870年代以降、南アジアや東南アジアのイスラーム教徒が、メッカ巡礼のために利用した、新しい海運業はどのような経緯で発達したのだろうか。

Q4 メッカ巡礼が盛んになったことは、その後のイスラーム世界にどのような影響をおよぼしたのだろうか。

Q5 さらに調べたいことを問いにしてみよう。

第14章

アジア諸地域の動揺

19世紀に入り、本格化するヨーロッパ諸国の干渉や植民地政策に対し、オスマン帝国や南アジア・東南アジアの諸国、そして清朝はどのように立ち向かおうとしたのだろうか。

人物コラムでは83人紹介しています。人物の詳しい情報やエピソードも交え、生徒の興味を引き出します。

1 西アジア地域の変容

オスマン帝国をはじめ、西アジア地域の列強への従属はどのように進行したのだろうか。

オスマン帝国の動揺と東方問題

多民族を抱えるオスマン帝国の支配は、18世紀半ばからゆらぎはじめた[1]。アラビア半島ではムハンマドの教えへの回帰を説く**ワッハーブ派**が豪族のサウード家と結んで自立し❶、北方ではオスマン帝国の宗主権下にあったクリミア＝ハン国（▶p.122）がロシアに併合された。

19世紀に入り、オスマン帝国の属州エジプトでは、ナポレオン軍撤退後の混乱期にオスマン軍人**ムハンマド＝アリー**（在位1805～48）が民衆の支持を得て総督となり、富国強兵と殖産興業の政策を進めた。シリアではキリスト教徒のアラブ知識人を中心にアラビア語による文芸復興運動がおこった。一方、フランス革命の影響を受けてバルカン半島でおこったギリシアの独立運動（▶p.175）は列強の支援で承認され、非ムスリム諸民族に大きな刺激を与えた。

❶彼らの国家は19世紀初めには聖地メッカとメディナを占領し、興亡を繰り返したあと、現在のサウジアラビア（▶p.231）に受け継がれた。

ムハンマド＝アリー 1769～1849

オスマン帝国領内のマケドニア生まれの不正規軍人でタバコ商人。派遣先のカイロでフランス軍の撃退に貢献し、エジプト総督になると、自分に敵対する旧支配層のマムルークを虐殺して権力を固め、エジプトに自立した政権を築いた。

Q ムハンマド＝アリーは、なぜシリアを領有できなかったのだろうか。

1 19世紀～20世紀初めの西アジアとバルカン半島

ムハンマド＝アリーは、オスマン帝国の要請でワッハーブ派やギリシア独立運動の鎮定に出兵し、その見返りにシリアの領有を求め、拒否されるとオスマン帝国と戦い、勝利した（エジプト＝トルコ戦争 1831～33、39～40）。これに対して、エジプトの強大化を望まない列強が軍事介入し、結局、ロンドン会議（1840）でムハンマド＝アリーに認められたのは、エジプト・スーダンの総督職の世襲にすぎなかった❷。このように列強はオスマン帝国の動揺を利用して勢力を拡大し、この間に成立した国際関係は、ヨーロッパの側からみて「**東方問題**」と呼ばれた。

経済的な従属化

列強は、カピチュレーション（▶p.134）を利用してオスマン帝国での経済的・法的な権益を拡大していった。綿花やタバコなどの商品作物の輸出の見返りにイギリスの安価な綿製品などが低関税で輸入され、現地の産業はしだいに没落した。さらに、1838年にオスマン帝国がイギリスと結んだ通商条約が属州のエジプトにも適用された結果、エジプトも自立的な経済発展の道が閉ざされた。ムハンマド＝アリー朝は近代化のために**スエズ運河**を建設したが（1869年開通）、莫大な債務のために英仏の財務管理下におかれ、内政の支配も受けるようになった。オスマン帝国も、クリミア戦争（▶p.178）の戦費以来、借款を重ねた財政は破産し、列強の経済的な支配を受けることになった。

オスマン帝国の改革

19世紀初めからオスマン帝国は、イェニチェリ軍団（▶p.132）の解体など一連の改革を進め、1839年から大規模な西欧化改革（**タンジマート**[2]（1839～76））に着手した。クリミア戦争後には宗教・民族を問わず、帝国の臣民を平等にあつかおうとする理念（**オスマン主義**）が現れた。これは法治主義にもとづく近代国家をめざす改革で、民族や宗派の問題を口実に干渉する列強への対応も目的とした。しかし、諸民族の離反は防げず、ムスリムのあいだには反発もおこった。

1876年、大宰相**ミドハト＝パシャ**[3]（1822～84）の起草した**オスマン帝国憲法**（ミドハト憲法）[4]が発布されたが、議会の急

2 タンジマートの開始　イスタンブルのトプカプ宮殿において、改革の勅令が発布された。

❷ここにムハンマド＝アリー朝が国際的に承認された。この国は1914年まではオスマン帝国の属州だったが、その後イギリスの保護国を経て、22年に王国となった（▶p.231）。

3 ミドハト＝パシャ

オスマン帝国憲法

第8条　オスマン国籍を有する者は全て、いかなる宗教及び宗派に属していようとも、例外なくオスマン人と称される。

第11条　オスマン帝国の国教はイスラーム教である。この原則を遵守し、かつ人民の安全又は公序良俗を侵さない限り、オスマン帝国領において認められているあらゆる宗教行為の自由、及び諸々の宗教共同体に与えられてきた宗教的特権の従来通りの行使は、国家の保障の下にある。

第17条　全てオスマン人は法律の前に平等であり、宗教宗派上の次項を除き、国に対する権利及び義務において平等である。

（粕谷元編『トルコにおける議会制の展開』一部改変）

4 資料 オスマン帝国憲法（抜粋）

Q オスマン帝国は、この憲法でどのような国家をめざしていたのだろうか。

二次元コードを21点掲載しています。文字資料や、関連する別の図版などを見ることができます。

③ 東アジアの激動

欧米諸国の圧力のもと、開国をせまられた東アジアの諸国は、どのような対応をとったのだろうか。

清朝の動揺とヨーロッパの進出

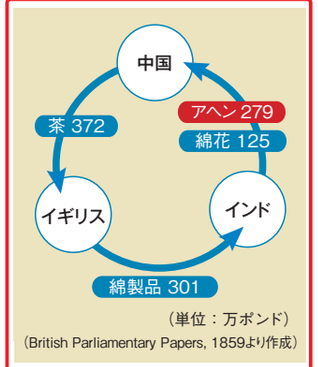
18世紀、清朝の人口は３億人に達した。しかし、土地不足による農民の貧困化も進み、18世紀末に四川などでおこった**白蓮教徒の乱**（1769～1804）は清朝を動揺させた。人口は19世紀半ばには約４億３千万人に達したため、財政は悪化し、政府の秩序維持能力も低下していた。

18世紀後半、イギリスは茶の輸入が増大して輸入超過となり、中国へ大量の**銀**が流出していた。イギリスは銀の流出に対処するため、19世紀にはインドから中国にアヘンを、中国からイギリスへ茶を、イギリスからインドへ綿製品を輸出する**三角貿易** 1 をおこなった。

清朝のアヘン貿易取締りは機能せず、中国から銀が流出 3 したことで財政難におちいった。そこで清はアヘン厳禁をはかって**林則徐**（1785～1850）を広州に派遣し、外国人商人からアヘンを没収して廃棄した。イギリスはこれを口実に、自由貿易の実現をはかり、**アヘン戦争** 2（1840～42）をおこした。

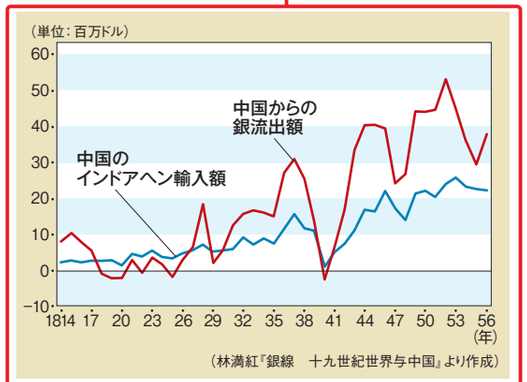
清はイギリスに敗れ、**南京条約** 4（1842）を締結し、上海・寧波・福州・厦門・広州の開港、香港島の割譲、賠償金の支払い、行商を通じた貿易の廃止などを認めた。1843年には清が領事裁判権・協定関税（関税自主権の喪失）・片務的最恵国待遇などを認める不平等条約を締結し、アメリカ合衆国・フランスともそれぞれ条約を結んでイギリスと同等の権利を認めた。

時代理解を促す、**統計などのデータ**を豊富に掲載しています。



1 アジアにおける三角貿易（1839年）

2 **アヘン戦争**　珠江河口付近の虎門でのイギリス艦隊の攻撃。描かれている中国側の木造船（ジャンク船）への攻撃ではロケット弾が威力を発揮した。
Q イギリスは、どのような目的でアヘン戦争をおこしたのだろうか。



3 **アヘン貿易と銀の流出**
Q 銀の大量流出は、民衆にどのような影響を与えたのだろうか。

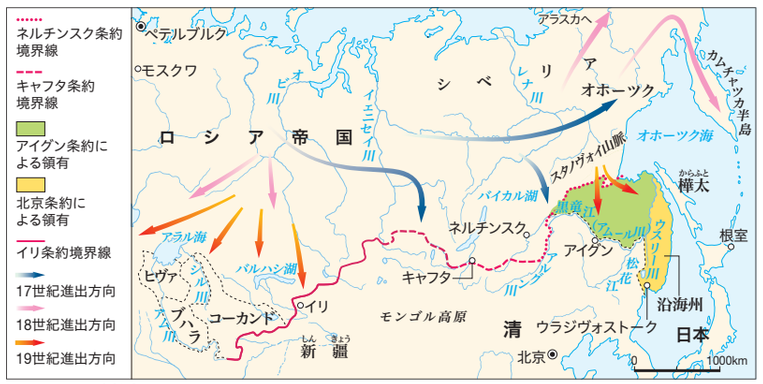
4 **19世紀半ばの東アジア**

林則徐 1785～1850
黄河の水害対策などの国内政治で活躍した官僚で、アヘン取締りのために広州に派遣されたが、アヘン戦争が勃発すると、紛争を引きおこした責任を問われて罷免された。広州赴任後に西洋の事情についての情報を集めており、それはのちに中国に外国事情を紹介する書籍となっていかされた。

しかし、開港後の貿易に不満をもったイギリスは条約の改定をはかり、アロー号事件❶を契機としてフランスと共同出兵し、**第２次アヘン戦争（アロー戦争）**（1856～60）が勃発した。敗れた清は**天津条約**（1858）と**北京条約**（1860）で、外国使節の北京常駐、天津など11港の開港、キリスト教布教の自由、九竜半島先端部のイギリスへの割譲などを認め、関連協定でアヘン貿易も公認した。また、清ははじめての外交機関である**総理各国事務衙門**（総理衙門）を設立した。

ロシアもシベリア進出 5 を強めていたが、第２次アヘン戦争時に**アイグン条約**（1858）で黒竜江以北を、**北京条約**（1860）で沿海州を獲得し、ウラジヴォストーク港を開いて太平洋進出の根拠地とした。ロシアは中央アジアでも南下してロシア領トルキスタンを形成し、**イリ条約**（1881）によって中国との境界を有利に画定した。

❶清の官憲が、広州港においてイギリス船籍の中国船アロー号に乗り込み、海賊の疑いで清人を逮捕した事件。イギリスは自国船籍の船に対するこのような行動は不当であるとして、清に対する戦争が開始されることとなった。しかしアロー号の船籍登録は期限を過ぎていた、という事実もあった。



5 **ロシアの東方進出**

本文の理解を深めるため、適度に側注を付しています。

第16章

第一次世界大戦と社会の変容

第一次世界大戦とロシア革命はどのような経緯でおこったのだろうか。また、その後の各国の社会、国際秩序にどのような影響をおよぼしたのだろうか。

1 第一次世界大戦とロシア革命

バルカン半島をめぐる対立が、なぜ世界大戦に発展したのだろうか。また、世界最初の社会主義国は、どのようにして成立したのだろうか。

バルカン半島の危機

20世紀に入り、イギリス・フランス・ロシアとドイツ・オーストリアの対立が進むなか、オーストリアは国内のスラヴ系諸民族にパン＝スラヴ主義の影響がおよぶことを恐れ、バルカン地域でのスラヴ系諸国の台頭をおさえようとした。1908年、オスマン帝国で青年トルコ革命がおこると❶、オーストリアはその混乱に乗じて**ボスニア・ヘルツェゴヴィナを併合**した。しかし、この２州はスラヴ系住民が大多数を占め、その編入を望んでいたセルビアは、この併合に強く反発した。

一方、ロシアは日露戦争（▶p.211）の敗北後、外交の主軸をバルカン半島に移し、1912年セルビアなど４国を**バルカン同盟**に結束させた。同盟は、第１次バルカン戦争（1912～13）でオスマン帝国を破って領土を拡大したが、その分配をめぐる対立から、バルカン同盟国内で第２次バルカン戦争（1913）❷がおこった。こうして列強の利害と民族問題が複雑にからみあったバルカン半島は、「**ヨーロッパの火薬庫**」と呼ばれる状態になった。

❶ブルガリアはこの革命の際にオスマン帝国からの独立を宣言し、翌1909年国際的に認められた。

第一次世界大戦の勃発

1914年、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの中心都市**サライェヴォ**で、オーストリアの帝位継承者夫妻がセルビア人により暗殺されると（サライェヴォ事件）、オーストリアはセルビアに宣戦した。つづいてロシアがセルビアの側に立つと、ドイツがロシアに宣戦した。イギリスとフランスもロシア側で参戦し、**第一次世界大戦**（1914～18）❷が始まった。

開戦直後、ドイツ軍は中立国ベルギーに侵入し、フランスに侵攻したが、**マルヌの戦い**（1914.9）で阻止され、西部戦線は塹壕戦❸による膠着状態におちいった。東部戦線では、ドイツ軍が**タンネンベルクの戦い**（1914.8）でロシア軍を破り、その後はロシア領内での戦いが続いた。

イギリス・フランス・ロシア側は**協商国**（**連合国**）、ドイツ・オーストリア側は**同盟国**と呼ばれた❹。日本は協商国側に加わり、オスマン帝国とブルガリアが同盟国側で参戦した。1915年にはイタリアが三国同盟を離れ、協商国側で参戦した。ヨーロッパで中立を最後まで維持した国は、北欧諸国やスイスなど、わずかであった。

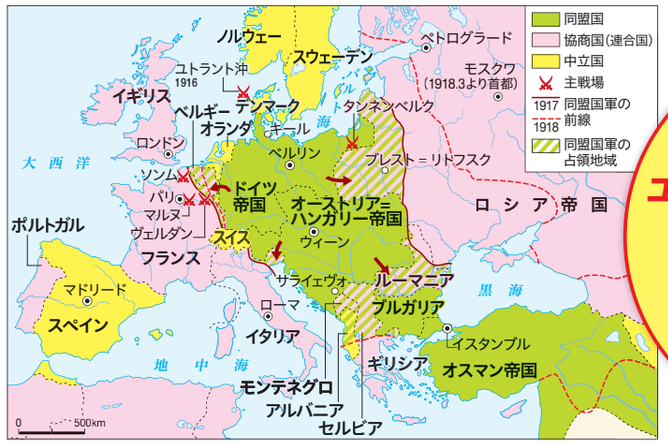
戦時外交と総力戦

第一次世界大戦中、列強は秘密条約にもとづく戦時外交を繰り広げた。現地住民の意志を

❸塹壕戦　西部戦線では、数百万の兵士が、しらみ・血・死体が充満する塹壕にこもって戦った。大砲や機関銃の出現で、身を隠して地面すれすれに銃をかまえる、こうした戦い方となった。

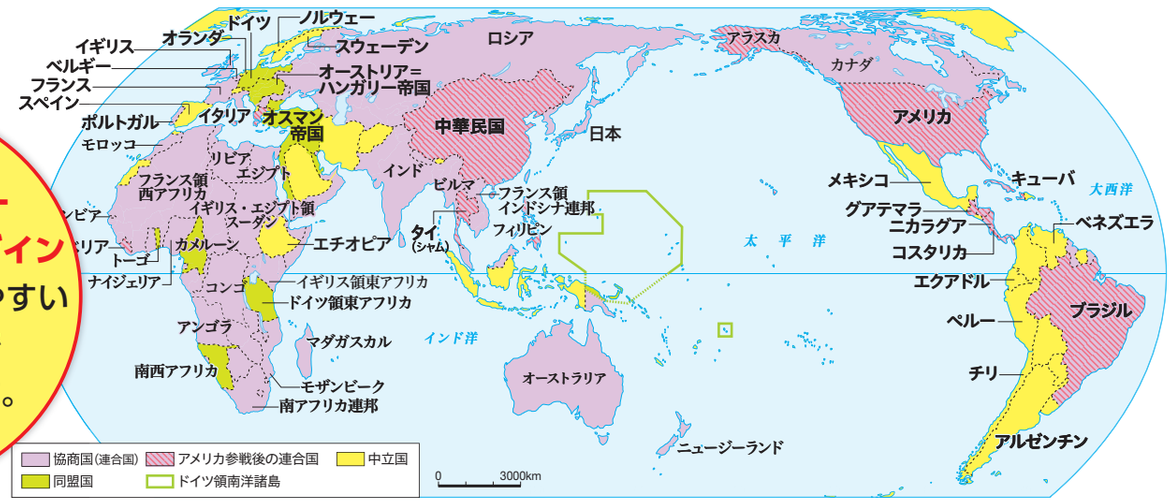
❷第２次バルカン戦争において、同盟国内はブルガリア対セルビア・モンテネグロ・ギリシアにわかれた。後者にはオスマン帝国・ルーマニアも加わり、ブルガリアは敗れた。

1 第2次バルカン戦争終結後のバルカン諸国



2 第一次世界大戦中のヨーロッパ

地図は、ユニバーサルデザインに則り、カラー配色や読みやすい線種で作製しています。



4 第一次世界大戦に関わった国と地域

第18章

冷戦と第三世界の台頭

冷戦は世界に広がり、東西両陣営の対立は激しさを増していった。そうしたなか、第三世界の登場や西側・東側両陣営内に生じた対立は、冷戦にどのような影響をおよぼしたのだろうか。

章の冒頭に、**章全体の学習内容をまとめた概観**と、それを**理解するためのヒントとしての「問い」**を設けています。

1 冷戦の展開

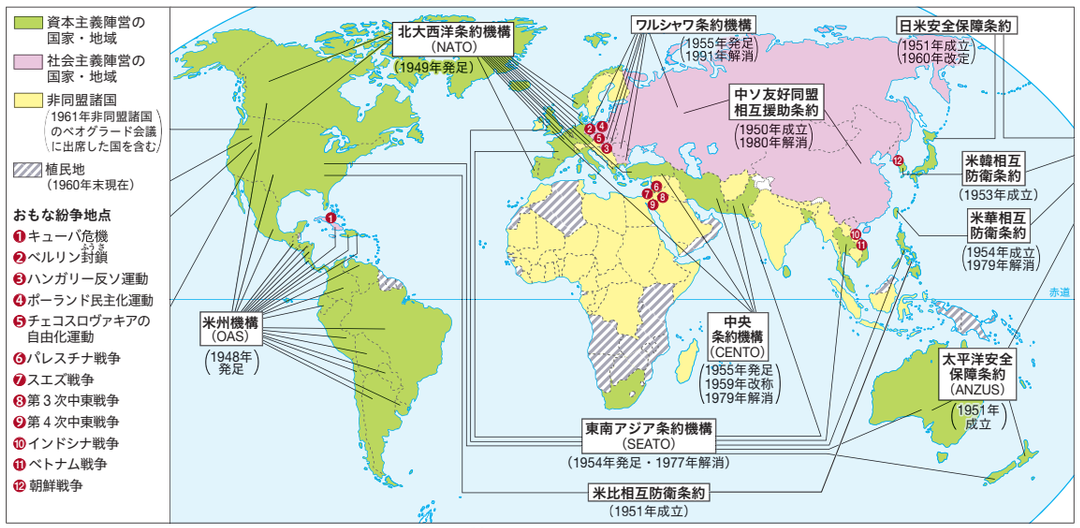
冷戦下のアメリカとソ連は、どのように軍事同盟構築や核兵器開発で競い、どのように和解の道を探ったのだろうか。

軍事同盟の広がりと核兵器開発

アメリカ合衆国は、北大西洋条約機構(NATO)だけでなく諸地域に軍事同盟を構築した。1948年に中南米諸国とともに**米州機構**(OAS)、51年に**太平洋安全保障条約**(ANZUS)、54年には**東南アジア条約機構**(SEATO)、55年には**バグダード条約機構**(中東条約機構〈METO〉)❶を結成した1。また、二国間条約として1951年に日米安全保障条約を成立させ、同年にフィリピン、53年には韓国、54年に中華民国(台湾)とも相互防衛条約を結んだ。

1949年、ソ連が原子爆弾の開発に成功し、52年にはイギリスも保有した。この年、アメリカはより強大な破壊力をもつ**水素爆弾**(水爆)の実験に成功したが、翌53年にはソ連も水爆を保有した。核開発競争の過熱とともに2、核戦争の脅威が高まると、核兵器廃絶と平和を訴える運動も世界各地に広がった❷。

❶1958年の革命によってイラクは王政から共和政になり、59年にバグダード条約機構から脱退したため、これ以降、同機構は中央条約機構(CENTO)と改称した。



1 冷戦の時代に結ばれた世界の諸同盟とおもな地域紛争

アイゼンハワー 1890〜1969

第二次世界大戦の連合国軍ヨーロッパ最高司令官。戦後、共和党から要請をうけ、政治経験をもたずに大統領候補となり当選した。彼が大統領をつとめた1950年代から60年代初めは、合衆国の黄金時代といわれる一方、軍備拡大と軍需産業が巨大化した。皮肉なことに、退任に際して軍人出身の彼が、軍産複合体の巨大化に警鐘を鳴らした。

Q どのような目的で東南アジア条約機構を設立したのだろうか。

戦後のアメリカ社会

冷戦が進展すると、アメリカ合衆国の国内では反共主義の気運が強まり、1950年頃から左翼運動や共産主義者を攻撃する「**赤狩り**」❸が始まった。53年に大統領に就任した**アイゼンハワー**(1890〜1969(在任1953〜61))は、朝鮮戦争の休戦協定を実現し、ソ連との緊張緩和をめざしたが、軍事同盟網の構築も進めた。その一方で、アイゼンハワーは核開発競争の過熱に危機感を覚え、原子力の平和利用を推進するために、原子力発電の開発を本格化させた。

p.244
p.246

核保有国	実験開始年	実験回数 (大気圏)	(地下)	(水中)
アメリカ合衆国	1945	206	912	5
ソ連	1949	223	756	3
イギリス	1952	21	24	
フランス	1960	50	160	
中国	1964	22	26	
インド	1974		6	
パキスタン	1998		7	
北朝鮮	2006		1	

2 各国の核実験回数(Our World in Dataより作成)

1950年代から60年代にかけてのアメリカは、平時でも巨額な軍事費を支出するようになり、軍部と軍需企業が癒着した「**軍産複合体**」の形成が進んだ。その一方で、大衆消費社会はいっそう発展し、アメリカ式の豊かな生活様式3は、西側諸国の人々にとって理想のモデルとなった。

❷科学者のアインシュタインや哲学者のラッセルらの呼びかけにより、1957年にカナダのパグウォッシュで核兵器廃絶を求める会議が開催され、多数の科学者が参加した。

❸共和党上院議員マッカーシーが、知識人や公務員の思想追及活動の先頭に立ったので、こうした傾向はマッカーシズムとも呼ばれた。

西欧・日本の経済復興

1950年代以降、西欧諸国では、アメリカ合衆国に対して自立性を取り戻すために、**地域統合**の必要性が強く認識された。1952年、フランス・西ドイツ・イタリア・ベネルクス3国は、石炭・鉄鋼資源の共同利用をめざす**ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体**(ECSC)を発足させた。58年には**ヨーロッパ経済共同体**(EEC)とヨーロッパ原子力共同体(EURATOM)が設置され、67年には3共同体が合併して**ヨーロッパ共同体**(EC)となり、主権国家の枠をこえた西欧統合の基礎がつくられた。

p.273

一方、イギリスは、西欧統合の動きから距離をおき、1960年に北欧諸国などとともにヨーロッパ自由貿易連合(EFTA)を結成した。しかし、ECが発展すると参加を希望するようになり、73年には参加を認められた(拡大EC)4。

西ドイツでは、**アデナウアー**政権のもとで、「経済の奇跡」といわ

p.245

3「**奥様は魔女**」(1964〜72年)
大人気を博したアメリカのテレビコメディ。

❹イギリスはこのときEFTAを脱退した。現在のEFTA加盟国は、アイスランド・スイス・ノルウェー・リヒテンシュタインの4カ国である。

ポスターや風刺画など、**印象的な資料**を多数掲載しました。

ド＝ゴール 1890〜1970

彼は1945年当時、アルジェリアの独立運動を弾圧していた。54年に同地の独立運動が再燃したあと、58年に中心都市アルジェで植民地放棄に反対する白人植民者と現地軍上層部が蜂起し、パリへ進撃する動きをみせた。このときフランス国民のあいだには、36年フランコ軍がモロッコからスペイン本土へ進撃した悪夢(▶p.236)がよみがえったといわれる。そこでド＝ゴールに再登場が要請されたのであった。

フルシチョフ 1894〜1971

社会主義国の真の権力者は、党の最高指導者といわれた。スターリンの死の直後、後継者と考えられた人物は第一書記の地位を捨て、首相に専念した。かわって第一書記にすえられたのが、当時モスクワ市の指導者のフルシチョフであった。のちに彼は首相も兼任して党・政府の最高権力者となった。

れるほどの経済成長が実現した。

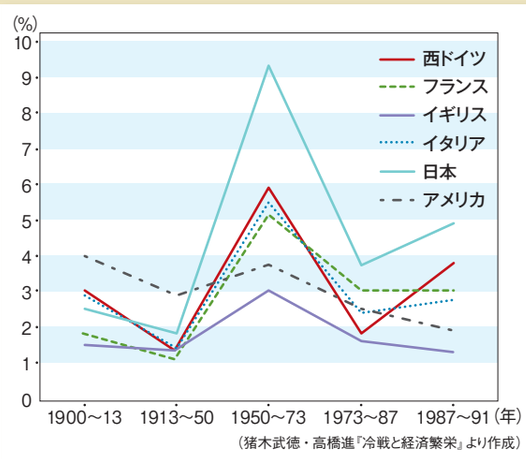
フランスはアルジェリアの独立をめぐって国内の対立が激化した。1958年、**ド＝ゴール**(▶p.238)が大統領権限の強力な**第五共和政**を成立させた。大統領となったド＝ゴール(在任1959〜69)はアルジェリアの独立を認めるとともに、アメリカに対して自立的な外交政策(▶p.254)を追求し、核兵器を保有したほか、中華人民共和国を承認した。66年にはNATOへの軍事協力も拒否した。

日本は、朝鮮戦争(▶p.246)で経済復興のきっかけをつかんだ(特需景気)。1955(昭和30)年には自由民主党が成立し、長期政権を担うようになった。56(昭和31)年にはソ連と国交を回復し、国際連合への加盟も実現した。この頃から日本でも**高度経済成長**が始まったが、60(昭和35)年の日米安全保障条約の改定をめぐって激しい国内対立も発生した。また、65(昭和40)年には韓国とのあいだで**日韓基本条約**❺を結び、国交を正常化した。

経済の視点からも考察ができるよう、グラフなどの資料を工夫しました。

探究しよう　西側諸国はどのようにして経済の復興と成長を実現したのだろうか

第二次世界大戦は敗戦国だけでなく、戦勝国にも甚大な被害をもたらし、多くの人々が窮乏生活をよぎなくされた。❶戦後の混乱からの復興をめざす資本主義諸国は、社会保障制度を整備し、国民の生活を保障する福祉国家体制の構築に取り組んだ。その結果、1955年頃から70年代前半において、❷西側資本主義諸国は未曾有の経済成長をとげた。



資料1 **先進国各国の20世紀の経済成長率**(%)

資料2 **エアハルト**(1897〜1977)
ドイツの政治家。西ドイツ発足後、アデナウアー政権の時に経済相となり、社会福祉的要素を加味した「社会的市場経済」という政策のもと、「経済の奇跡」を実現したとされる。

Q1 下線部❶に関連して、資本主義諸国が福祉国家の建設をめざしたことには、どのような目的があったと考えられるだろうか。

Q2 下線部❷について、各国の経済成長はどのような条件のもとに実現したのだろうか。それぞれの国の経済発展が著しい時期に注目し、経済の復興と成長が進んだ要因を調べてみよう。

4 **ソ連共産党大会で演説するフルシチョフ**　1956年、第20回党大会で西側との平和共存を提唱し、2月25日におこなわれた非公開の報告でスターリン批判をおこなった。

Q彼の演説は東欧諸国にどのような影響をおよぼしたのだろうか。

5 **ハンガリーの反ソ暴動**　1956年10月ハンガリーの首都ブダペストでは、スターリンの巨大な像が市民によって引き倒された。

Qポーランドと異なり、なぜハンガリーはソ連に軍事介入されたのだろうか。

本文の理解を深めるために、図版などの資料にも「問い」を付けています。

ソ連の「雪どけ」

1953年にスターリンが死去すると、ソ連では外交政策が見直され、朝鮮戦争の停戦が成立し、ユーゴスラヴィアと和解した。56年2月、ソ連共産党大会で**フルシチョフ**(1894〜1971(在任1953〜64))第一書記は、スターリン時代の個人崇拝や反対派の大量処刑などを批判し、自由化の方向を打ち出した(**スターリン批判**4)。さらに、西側との**平和共存**を掲げ、コミンフォルム(▶p.244)も解散した。これらの転換は「**雪どけ**」と呼ばれ、東欧諸国に影響を与えた。

1956年6月、ポーランドで民主化を要求する運動がおこったが、共産党は改革派のゴムウカ(1905〜82(在任1956〜70))を指導者に選んで事態を収拾した。しかし、ハンガリーでは、同年10月に民主化とソ連からの離脱を求める大衆行動がおこり、ナジ首相(1896〜1958(在任1953〜55、56))もこれを支持すると、ソ連は軍事介入によってこの動きを鎮圧し、のちにナジを処刑した5。

一方、フルシチョフは西側諸国との関係改善に力を注いだ。1955年に西ドイツと国交を結び、56年には**日ソ共同宣言**❻で日本と国交を回復し、59年には訪米してアイゼンハワー大統領と会談した。しかし、翌年、アメリカの偵察機がソ連上空で撃墜される事件がおこると、東西関係は再び冷えこんだ。61年に東ドイツ政府が築いた「**ベルリンの壁**」は、東西対立の象徴となった。

フルシチョフは、社会主義体制の優位を示すために宇宙開発に力を入れた。1957年に世界初の人工衛星スプートニク1号を打ち上げ、61年には世界初の有人宇宙飛行に成功した。

❺この条約によって、日本は韓国を朝鮮半島の唯一の合法政府と認め、韓国とのあいだに国交を樹立するとともに、韓国併合条約をはじめとする戦前の諸条約が無効であることを確認した。賠償金については、日本側が援助資金を提供することと引きかえに、韓国側は請求権を放棄した。

❻日ソ共同宣言は、日ソが平和条約を締結した後に、ソ連が歯舞群島および色丹島を日本に引き渡すとした。しかし、平和条約は今日まで締結されず、北方領土問題も未解決のままである。

1 まとめ　**米ソ冷戦下、西欧は統合の基礎を築き、日本も国際社会への復帰を果たした。そうしたなか、フルシチョフの政策転換は、その後の国際情勢にどのような影響を与えたのだろうか。**

『高校世界史』の特色

1　要点をおさえた、わかりやすい教科書

- 『詳説世界史』の章立てに準拠し、簡潔で読みやすい表現に改めました。
- 図版529点、地図119点、グラフ・表37点を掲載しています。
- 人物コラムも83点掲載しています。

2　「探究」の構造を理解できる、問いを中心とした展開

- 部冒頭の「アプローチ」で、各部の歴史的な特徴や視点を大きく捉えることができます。
- 学習指導要領に沿って、章、節、図版、節末に問いを設定し、問いを主体とした展開のなかで「探究」の学習を進めることができます。

3　資料読み解きのスキルが身につく

- 「探究しよう」を28点掲載。グラフ、図版、文字資料の読み解きなど、様々なスキルが身につきます。
- 資料を読み解く問いから発展的な問いまで、様々な問いを設定しています。
- 二次元コードを21点掲載しています。

『高校世界史』の著作者

[編者]

木村　靖二　東京大学名誉教授
岸本　美緒　お茶の水女子大学名誉教授
小松　久男　東京大学名誉教授
橋場　　弦　東京大学教授

[著作者]

阿部　幸信　中央大学教授
池田　嘉郎　東京大学准教授
勝田　俊輔　東京大学教授
島田　竜登　東京大学准教授
林　佳世子　東京外国語大学学長
村上　　衛　京都大学准教授
小豆畑和之　東京都立西高等学校教諭
仮屋園　巖　東京都立国立高等学校教諭
宮本　英征　玉川大学准教授
株式会社 山川出版社

B5判（257mm×182mm）　302頁

☒図版（写真）	529点	☒地図	119点	☒グラフ・図表	62点（グラフ24＋図25＋表13）
☒文字史料	33点	☒二次元コード	21点		

山川出版社　〒101-0047　東京都千代田区内神田1-13-13
TEL 03-3293-8131　FAX 03-3292-6469　https://www.yamakawa.co.jp/